

# 私的に書かれた「語り」を読むこと

——社会調査のデータとしての日記と手紙について

水谷史男

発言されている語りは、伝達である。その存在傾向は、聞く人に対して、語りがそれについて語っているものへの開示的存在に、die Teilnahme 参加(させる)ことを目指している。

自分を言い表す際に話された言葉の中に、すでに潜んでいる平均的な理解にしたがって、伝達された語りは、広く了解可能だが、そのさい聞いている人は自らを、語りの内容 *in content* を根源的に了解している存在にと、持ち込んでいるわけではない。人は語られている当の存在するものを、それほど了解しているわけではなく、すでにただ語られたことそれ自体を、聞いているだけだ。語られたことは了解されるが、それが触れている内容はただ大まかな上っ面にすぎない。人は言われたことを、共通に同じ平均性で了解するので、同じことを *meinen* 思い考える。

(M・ハイデガー『存在と時間』中、原著一七八三年、桑木務訳、ただし訳文は筆者が一部改変。一九六一年、岩波文庫、八四〜八五頁)

私的に書かれた「語り」を読むこと

はじめに

- 一 社会調査における「日記」と「手紙」
- 二 手紙・自己表現と伝達意思としてのライフ・ドキュメント
- 三 日記・社会学の见たいものと文学の表現したいもの
- 四 応用問題 ある手記  
おわりに 私的な「語り」を読む、ことの有効性

## はじめに

今日、社会学系の大学を中心に、一般的に行われている社会調査の教育では、最初に「量的な」研究法と「質的な」研究法をあげ、これに対応して数量的なデータを集めて分析する社会調査と、「質的なデータ」を使って分析する社会調査がある、と説明するようになってきている。「量的な調査」が想定しているデータとは、要するに一定の尺度で測定された数字セットのことであり、「質的な調査」が使用するデータとは、インタビュー記録や書かれた文章や画像・映像を含めた、数字ではない言語的な記録を意味している。この両者はいちおう「データ」と呼ぶにしても、まったく違った性質のものであり、その収集の仕方も分析の手法も妥協の余地なく異なっている。

しかし、これは現在の社会学系に特有の分類であり、他の社会科学、たとえば経済統計をもちいる経済学や実験データを使う心理学などでは、このようなデータの「質と量」による区別と並列は、なにか奇妙な方法的混乱・折衷にみえるだろう。仮説や命題を数式化し実験・観察で測定したデータを数値で記録し分析するのは、科学として確立した方法であって、仮に数値化できないもの、言語や映像で記録したものを使用する場合であっても、それを普通は「データ」とは呼ばない。

周知のように二〇世紀のなかば、社会科学においても、数量化された「データ」の蓄積と測定の技術が、コンピュータの普及と共に飛躍的に進んだ。社会現象の因果関連はきわめて複雑であるから、測定されたデータの精

密性や信頼性は、一定のあいまいさ、不確定性をもたざるをえない。ただ、自然科学のレベルには至らないとしても、大量現象の大数的認識と確率・統計学の発達が、社会科学の数量化を促進し続けたので、一九六〇年代ぐらいいまで、アメリカを中心に行動科学や数量的社会調査の隆盛が社会科学、とくに社会学を席卷したような状況になった。

そこでモデルとなったのが、仮説検証型の経験的社会調査、つまり条件をコントロールしたうえで仮説を立て、変数を絞り込んで統計的に意味のある数のサンプルを選び、精密で大がかりな調査を行って数量化したデータを獲得する。そこから仮説に適合する結果が出たかどうかを検証する、という手続きである。自然科学に倣えば、そのようなデータの蓄積から導かれる確かな結論こそ、科学の名に値する専門知であり、真理だと考えるわけである。これはその成果はともかく、近代科学の研究・調査に従事する研究者の、基本的態度、職業的倫理にまで高められる。もしこの一連の手続きのどこかに、誤りやごまかしがあれば、それは真理の捏造であり、また他の研究者の業績の盗用・剽窃などをすれば、知識の犯罪に等しいという了解が定着した。

その場合の「データ」は、実験や観察でえられた数値化された観測データが想定されている。画像・映像も「データ」であるが、今日のデジタル技術を使えばそれは数値化されている。実証的科学的公準からすれば、「質と量」の区別は数量化の内部の問題であり、データ自体が測定における絶対量を表示する quantitative な尺度で取られているか、便宜的なカテゴリー尺度で数値化した qualitative なデータかというテクニカルな問題でしかない。この場合「量的データ」も「質的データ」も、どちらも数字で記録されたデータである。<sup>1)</sup>

しかし、社会学では（とくに日本の社会学では）、数量化されたデータの統計的分析を金科玉条と考える教条

的な科学原則主義が、ほとんどの社会学的問題は、数量化され十分に設計された信頼できる大量の社会調査データさえあれば、いくらでも意味のある分析結果を出せると考える人々がいた一方で、「数字や数学で何がわかるものか」と数量的社会調査を基本的に信用しない人々がいた。そもそも地べたをはい回る経験科学などというものに興味を持たない書齋派は別として、社会学はフィールドで汗をかいてこそ有効な知識が得られると考える彼らには、数量的な調査が普及する前の、昔からやっていた方法、つまりどこかに出かけて行って、そこで人に会ってじっくり話を聞いたり、古文書や記録資料をみつめて読んだり、村に住んでそこに暮らす人々や出来事をノートに書く、といったある意味プレモダンな研究活動を、もう一度社会学に回復したいと秘かに考えていたと思われる。実はそれは日本だけの動きでもなかった。戦前のシカゴ学派の都市研究などをみれば、文化人類学なども共通する地味で野暮なフィールドワークの方法は生きていたし、フランスやドイツの社会学は、数量的方法を導入するに際しても、もっと理論への方法的態度に注意深かった。

問題は、実証主義と近代科学の方法を、数学と数量化の力を借りて一気に社会現象に適用する立場に対して、これに反感をもつ「質的（非数量的）研究」に拠る社会学者は、それなりの道具と用語の「リニユーアル」を必要としていたことだろう。一九七〇年代以降、それはまずは社会調査という道具の近代化・現代化と、「質的（非数量的）研究」と「データ」という用語の採用にむかった。そして日本でその流れの中心となったのは、「生活史研究」と「エスノメソドロジー」ではないか、というのが筆者の今のところの展望である。

エスノメソドロジーが人間のミクロな相互行為、とくに言語に着目する、シュッツからガーフィンケルという西洋起源の現象学的社会学の流れにあるのに対して、生活史研究は戦前の農村研究や柳田民俗学などにも通じる

私的に書かれた「語り」を読むこと

ドメスティックな社会史研究につながっていると考えられる。日本の生活史研究の先達であった中野卓の出発点『商家同族団の研究』<sup>②</sup>が、福武直や有賀喜左衛門流の農村研究の方法の関西商家への適用であったことから、伝統的な知の血統のようなものをうかがうことができる。

以下本稿で採りあげるのは、そのような社会学における一般に「質的研究」と一括して呼んでいる経験的社会調査の、ある立場、そのなかでもインタビューなどの口述記録や生活史ではなく、日記と手紙というライフ・ドキュメント、生活誌について具体例を素材に若干の考察を行う。この点ではエスノメソドロロジーについても、検討する必要があるとは思いますが、ここでは採りあげない。

まずは、日記や手紙の「データ」としての価値と取扱いについて。

## 一 社会調査における「日記」と「手紙」

「日記」や「手紙」という個人の書いた文章が、社会学にとつての「データ」としてどういう意味をもっているかを考えるにあたって、その前に数字と言葉の取り扱いについて、少し考えておきたい。

「質的研究」という立場をいちおう認めたとして、これに対する「量的研究」（数量的な研究を唯一の方法とする立場からはわざわざ「量的研究」などという言い方はしないだろうが）が取り扱う「数量データ」「質的データ」はたんに測定数値としての数字に過ぎない。数字だから、コンピュータで統計ソフトを使えばいくらでも数学的な分析が可能である。データの操作的変換や相関係数の計算や有意差の検定などから、さらに数学的な命題の分

析検証もできるかもしれない。でも、言葉で語られたものを、そのまま言葉にして（数量化に対する言語化！）それが「データ」であるとは、どういうことか。「量的研究」者には理解できない世界だろう。

近年の社会学で「質的研究」あるいは非数量的記録についても「データ」という言葉が盛んにもちいられるようになったのは、ひとつはグラウンデッド・セオリーの影響があるのかもしれない。それは一九六〇年代のパールソンズ流構造機能主義の批判、上からの「グラウンド・セオリー」に対抗するという理論的含みから出てきたひとつの手法だった。

グラウンデッド・セオリーと呼ばれる方法は、一九六七年にバーニー・グレイザーとアンセルム・L・ストラウスの共著として出された『データ対話型理論の発見』で提唱された方法である。<sup>3</sup> グレイザーはニューヨークのコーンビア大学でマートンとラザースフェルドに学んだ社会学者で、いわば数量的調査と経験的 sociology の理論化を考えていたのに対し、ストラウスは伝統的なシカゴ大学の足で稼ぐ調査屋の訓練を受けた社会学者。この二人が手を組んで方法的な課題としたのは、理論↓仮説↓調査↓データという演繹的な流れを逆転し、データから出発して理論へと遡る方法の具体化を考えることにあり、およそ次のような状況を意識していた。実証主義的な仮説検証型社会調査が、実際はただやみくもに調査を繰り返しているだけで、その成果が蓄積されてまとまった理論の生成につながっていない状況への疑問と批判である。あらかじめ立てた仮説の検証だけを、お膳立てされた数学的数量分析だけで求めるのではなく、データそのものの突っ込んだ分析を試みなければならず、そのためには特別なやり方を工夫しなければならない、という主張。

これが「グラウンデッド・セオリー」と呼ばれたのは grounded on data データに基礎を置く、ということ

から来るのだが、その場合の「データ」とはどんなものを考えているのか。それは当初「質的データ」（数値としての質的カテゴリ・データ）をも含むものでもあったが、その後グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）は、もっぱら「質的研究」として扱われる言語的データに、つまりインタビュー面接記録などの分析手法として、ある意味で進化すると同時に狭く技術化していったようにも思える。

グラウンデッド・セオリーには、数字ではなく言葉を「データ」として精密に捉えようという姿勢があると同時に、それは数字の「データ」と同じ論理で言葉の「データ」をできるだけ洗練した形で取り扱いたいという狙いがある。それは言葉の集合としての「データ」を仕分けして分類する「コード化」、要約して名付ける「カテゴリ化」、そしてキーワードになるデータの小部分（文節・文）を文脈 context から切離して解釈する「切片化」などの技法を開発する。そこに漂っている指向は、規格化され標準化されて誰もがこれを習得すれば言語「データ」を明晰に分析できるようなる、という技術的合理化への欲望と、それと相反する解釈の深さという職人技への願望である。それらは実は、極度に数理的な思考に共通する合理主義と、情緒的感情的な言葉に反応する自意識、そのような自意識を質的研究の中に取りこみたいという考えとの矛盾を孕んでいる。

それは当然のように、言葉で記録された「データ」を、どんどん切り刻んで切片化する分析的な方向（それは数量化に近づく）と、公約数的に細部を切り捨ててカテゴリにまとめていく縮減的な方向（抽象化）に分裂していく。そこで残るのは、「文脈」社会的コンテキストの問題であるだろう。言葉は数字と違って、単語だけでは自立して機能できない。それは文になっても同じで、文脈の中で意味は膨らみ多彩になると同時に、不確定性を帯びる。人が数字で考えるときと、言葉で考えるときでは、何が違うか？ 数字が示すものは数式という構造



の中で動く変数の値であるのに対して、言葉が示すものはそれが連なる文脈に依存した揺れ動く意味の醸し出すイメージである。それは聞いたり読んだりするたびに多義的な解釈を必要とする。

ここでグラウンデッド・セオリー・アプローチが無意味だと言いたいのではない。言葉の集合を「データ」と呼んで、その分析手法を徹底して規格化・合理化することは、エスノメソドロジーの戦略とは違うが、できるだけミクロな、発生的な段階の言葉に即して丁寧な分析しようという指向において共通する。そういう忍耐のいる作業を面倒くさがる研究者や実践家には、態度として身につけてもらう方が生産的だろう。とくに日本の「文学的」風土において言葉を読むことが、情緒的・感情的な要約に流れがちな思考を、矯正するのにグラウンデッド・セオリーは役に立つような気がする。

そこで、言葉で語られ、記録され、読まれる文書を、ライフ・ドキュメントとして一括した場合に、社会学の「データ」として扱うとすれば、どういう問題があるのか。これまで一般的に述べられていることを、ちょっと整理してみると、とりあえず以下のような分類が可能だろう。

## 1 語られた言葉の採集・記録

\*インタビュー…面接場面で語った言葉を、テープなどに録音する方法が典型的。

「口述記録」↓トランスクリプト（文字おこし）↓「文字記録」という作業を経て、文書化する。生活史の聴き取り、さまざまなテーマの個別インタビューなど。

\*過去に保存された録音テープ、映像記録などの二次分析。

私的に書かれた「語り」を読むこと

私的に書かれた「語り」を読むこと

## 2 書き残された文書・記録

\* ライフ・ドキュメント：「個人的記録」：手紙、日記、自伝、写真、動画、絵画など。

\* 「公的記録」：日誌、名簿、行事記録、雑誌・卒業アルバムなど。

これをその文書記録の作成目的と書き手が誰であるかの区別でみたとき、図1のような四類型が考えられる。

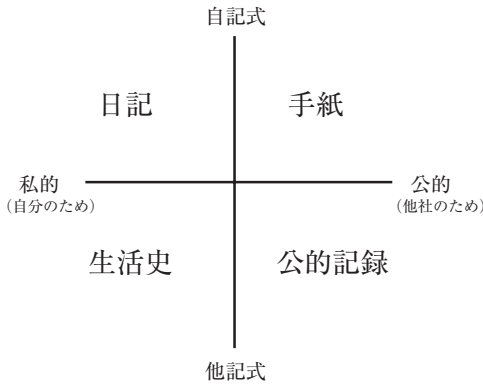


図1 Life Document の分類

つまり、横軸は誰かに読ませることを目的としない自分のために書くか、誰か特定の相手あるいは不特定の他者が読むことを想定して書くかの相違。縦軸はその文書を作成するのが本人（自記式）なのか、インタビュー記録のように本人以外（他記式）なのかの相違である。これを組み合わせてみると、「日記」は自分のために自分で書く（例外的に、誰かに読ませたり出版したりすることを前提に書かれる日記もあるが）、「手紙」は特定の相手に読まれることを前提に（差し出されない手紙も含め）本人によって書かれ、「生活史インタビュー記録」は、語りを依頼し記録するのは本人ではない（それを純粹に自分のための私的な行為とはいえないかもしれないが）。日誌・名簿・雑誌記事などの「公的記録」文書は公共性を持ち、ほんらい個人的な目的で作成されるものではないから、書き手が誰であっても、他記式と考え

てもよいだろう。

実証主義的な歴史研究ではまずは公的記録を中心に、事実の確証を求める傾向があり、当事者へのインタビューも併用されるが、資料としての価値はその時点で書かれた文書の方が重視される。個人の記憶は、しばしば不確かだったり変形されたりするからだ。

生活史研究における主要な方法は、インタビューである。自分のことを語ってもらうためには、さまざまな条件を整え、じゅうぶんな時間をかけなければならない。なによりも安心してありのままを語ってもらうためには、語る側と聞く側のラポールが不可欠であることはいうまでもない。さらにその生活史をどのように分析し解釈するかが、大きな問題である。しかし、ここではインタビューの問題は主題としない。

ただ、インタビューでは、「語り」をどうやって引き出すか、それをどう記録するかが重要だが、その意味では、エスノメソドロロジーの会話分析や、精神分析や心理カウンセリングなど、間接的な時空間で対面的な接触をする研究や治療行為との、共通性と相違点の問題にはなるだろう。その場合、あくまで語る主体の自由度を最大限にして、記録者に徹する客観主義的観察態度を守る立場と、観察者と被観察者という役割を捨てて、相互行為における行為や言語の交換、場合によっては積極的介入を組み入れる立場がありうる。

生活史をはじめ、カウンセリングなどでも、あくまで当事者に心おきなく語らせることを理想とする客観主義に立つ場合が多いようだ。しかし、どれほどインタビューする側が控えめにしても、面接場面は具体的な人間間に向かい合うわけだから、たんなる録音機械やビデオカメラが置いてあるのとは違うわけで、そこがテクニカルな問題ではあるだろう。

既に書かれた文書をテキストとして分析する、ライフ・ドキュメントの場合は、そういう問題は考慮しなくてもよいという点で、手紙や日記による個人的な記録は、それが手に入りさえすれば、問題はそれをどう読むか、というところに集中する。書かれた文書を主要な手がかりとする研究といえば、まず歴史学が思い浮かぶ。歴史学は、近過去についてその生存者がいる場合には、インタビューなど生活史的なインタビューを試みることはもちろんあるだろうが、もはやその時代をリアルタイムで生きて記憶している人間がいなくなった時代を研究する場合は、文書記録が最大の手がかりになる。歴史学における実証主義的研究は、研究対象とするその時代に書かれた文書や記録を一次資料として（つまりこれが「データ」として）そこから諸仮説を検証していくという手続きになる。その場合、事件史や経済史、外交史などの場合と、社会史や民衆史の場合で、日記や手紙のような個人の記録の扱いは変わってくるだろう。歴史学の場合はいくまで、歴史的事実の確認が第一義に問われ、その事実の中で生きている人間が何を考えていたか、の追求になるものと考えられる。

それは社会学においても、同様だと考えてよいだろうか？ 日記、手記、自伝、手紙などをどう扱って、なにを明らかにできるのか、という問題も考えておく必要がある。そこで、まず手紙をもちいた社会学的研究として、有名な古典的研究をみてみよう。

W・I・トーマスとF・ズナニエツキの共著になる『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』（原著は一九一八年から二〇年にかけて五分冊で出版された二二五〇頁に及ぶ大著<sup>4</sup>）は、二〇世紀初期にアメリカ社会学が生んだ画期的な著作、とくに移民の生活記録として手紙および生活記録を使ったものとして、語り伝えられる研究である。この本のテーマは、一九世紀末から一九二〇年代まで北米、アメリカ合衆国に東欧から大量の移

民が流入したという事実を背景に、移民家族の生活の実態を追求したもので、当時のシカゴ学派の社会学者たちが取り組んだ新たな社会変動過程の記録と分析の中に位置付けられる。

トーマス&ズナニエツキの分類によれば、家族の手紙は四つに類型化できる。

1 儀礼的な手紙——普通は家族全員の出席を求めるような家族的行事の際に送られる——結婚式、先祖の聖名祝日、クリスマス、新年、イースター。これらの手紙は儀礼上のスピーチの代わりである。留守にしている成員は、スピーチを自分で言うのではなく書いて送る。そうした手紙の機能は、集会やスピーチの機能と同じもので、その集団全体にかかわるある事態に対して家族感情を蘇生させようとするものである。

2 近況報告的な手紙——挨拶の手紙は、留守にしている成員の暮らしや家族集団が今後いつ会うかなどの詳しい話には触れない。しかしすぐ会えそうもないから、手紙が会合いの機能の代わりを一時的にせよ、しなければならぬ。こうしていかに別離が永いものであっても、家族の関心の共通性が保たれるのである。

3 感傷的な手紙——別れているために当初の半ば本能的な家族の団結が弱まる場合、この種の手紙は儀式的な場面とは全く関係なく、個人の感情を高揚する役目をする。

4 文学趣味的な手紙——儀式でも非公式な出合いでも、農民の審美的な関心が音楽、歌、詩の口誦などの形式に最も普通に表現されている。留守の成員は集団の供応に個人として参加できないので、代わりに手紙を詩歌にして送ることがよくある。また時には、同じやり方で返事をもらうこともある。その手紙は皆の前で披露されるわけだから、そこにいくらか虚栄心を満たす楽しみもある。ほんのちよっとした審美的な関

私的に書かれた「語り」を読むこと

私的に書かれた「語り」を読むこと

心が第一次集団の集まりで披露され、そのうち印刷されないと満足できない文学的関心にまで変わっていく。そうした進化にこの文学的趣味的な手紙が重要な役割を果たしていることは確かである。

5 仕事用の手紙——この代償機能は極めて単純である。農民はできる限り自分の仕事は自分でやろうとする。ただ別離が長期に及び会おうとしてもあまりに遠方の時に、仕事用の手紙に頼る<sup>5)</sup>。

桜井厚によれば、『ポーランド農民』刊行の一九二〇年から第二次大戦終結の一九四五年頃までは、生活史や個人的記録への大きな関心が寄せられた時代、生活史研究の第一期と考えられるが、この後は一九六〇年代半ばまで数量統計的社会調査の隆盛期を迎え、生活史など「個人中心のアプローチ」は低迷期に入ったとみる。

『ポーランド農民』への理論的な批判は当時からではないが、なんとといっても手紙という一次資料が語るリアリテイの迫力は誰も否定できない。

## 二 手紙・自己表現と伝達意思としてのライフ・ドキュメント

『ポーランド農民』に収録された手紙とはどんなものか、そのいくつかを読んでみる。なお、ここにあげた手紙は、原著第一部の「農民の手紙の形式と機能」中の「夫婦間の往復書簡」にあるボルコウスキ家の一部である<sup>6)</sup>。(原著 pp.160-172。訳は筆者による)。

ポーランドの妻からアメリカの夫ウラディスタフ ポルコウスキへの手紙

ウルシヤワ、1893.7.21

Dear Husband: いつものように七月四日付のあなたの手紙を受け取りました。今までリビキス（ポーン南部の都市）家の人たちと生活しています。私はとても満足してるとはいえませんが、私がいいつも長いこと（あなたと離れて）地味に一人だけで生きてきたからでしょう。そして今日も、あなたは世界の果てにいて、私はもうひとつの（果ての）場所にいます。奇妙な街角（周囲の連中）を眺めていると、私は憧れと後悔でどうしていいかわからなくなりません。あなたが私を忘れないで、いつまでも高貴さ（generous 気高い）を保っていてくれることだけが、私には慰めになります。あなたは私をポルコウスキ家（彼の兄弟）に行かせたいんでしょう。私はそこにいました。もし彼らがあなたについて尋ねただけなら！しかし誰も一言も言わなかった、私についてだけ……。もう私には書くことは何もありません。あなたにお願いするだけ、あなた、あなたのことをできるだけいっぱい手紙に書いて。元気にしてるかどうか、どうやって成功するか、それだけが私の喜びだから、他にはないの。私の友達といえ、私が何千（ルーブルのお金）を持っていて、次から次に私のところにやってきて、一二ルーブルを貸してくれて頼もう、と考えるような人たちだけなの……。そして、みんなが永遠に借りにくる。私はすでに知っている……。

そして今、私はあなたにさよならを言って、あなたの健康といっぱい良いことがありますように願います。私を忘れないでね。 敬具

あなたの妻、テオフィラ・ポルコウスカ

手紙は家族ごとにまとめられ、はじめにホルコウスキ家の事例について、トーマス&ズナニエツキによる解説コメントがあり、いくつかの手紙には註がつく。この一八九三年七月の最初の手紙には次の註がついている。

\* isolation 孤立・分離は、習慣的かつ望まれたものになる。我々は、農民家族ではこれを見出さなかった。もちろん、いくつか privacy 私的実内はつねに既婚者グループで探索されたが、性的関係のような出来事については多かれ少なかれ、他の人々の intrusion 押しつけ（割り込み）の過剰な伝統によって、保留されている。家族から既婚者によって訴えられる私秘秘密の総計は、コミュニティから要求されるものよりも、より少ない。要するに、農民にとってのプライバシーは、個人生活への社会的特性の裁定を越えることはい。この事例では逆に、一般に社会生活からの自発的個人的な隔離をもたらしている。

\* 家族の分解は確かにリアルであり、この事例では、書き手が夫の係累たちの冷淡さをとくに強調していることすら、彼女がもっぱら彼を引きとめようとする彼女自身の傾向に一致している。

二四通に及ぶ手紙は、一八九三年一二月の日付の最後の手紙まで一九年という長期にわたるが、いずれもポーランドにいる妻テオフィラからアメリカの夫に向けて書かれたもので、夫から妻への手紙はポーランドにあったのだろうか残っていない。



1894.4.12

Dear Husband: 拝啓 四月二日付のあなたの手紙を受け取りました。私は元気で、あなたがお変わりない事を心から願っています。今私は、あなたがワルシヤワに帰ってくるのを考え、喜んでいました。でも、あなたは帰る気はないと書いてきたので、私は神の意志を受け容れ、あなたの考えに従います。私は今指折り数えて（あなたが私をアメリカに呼んでくれるまで）こちらにいることにします。我らの主なる神様が、できるだけ早くそれを叶えてくれますように。だって私はほんとうに困っているの。なんて悲しい生活！私はほとんど誰のところにも行かない、だってあなたがワルシヤワにいた頃は何もかも違っていたから。昔は私たちには友だちがいて、みんな仲良くしていた、でも今は誰かに会いに行くと、私になにか物欲しそうだと警戒されたり、わざと無関心な顔で私を見るの……。

みんなそうなの、昔はとても親しかった人たちも。今はみんなそうなっちゃったの。

あなたは私に、ウラツィアのところで何か仕事をしてみるって書いたでしょ。でも、私は彼女からまだ一グロシーユ（ポーランドの貨幣単位）も受け取っていない。彼女は言ったわ。みんなが独り暮らしのために仕事をくわって頼む、そのうえ宿代と食費に二ルーブルを払わなきゃならないと。そうよ、あなた、お願い。どんな細かな事でも私に書いて。私が何をすればいいか、どんな服を着て、毛皮やフォトフレームや、その他つまらない物を手に入れる価値があるかどうか、教えて。私は肖像と十字架が欲しい。だけど、チェスト（蓋付きの箱）をもつのは禁じられたと聞きました。そう、何でもぜんぶ私に書いて下さいね。

あなたの愛する妻、テオフィラ・ボルコウスカ

私的に書かれた「語り」を読むこと

私的に書かれた「語り」を読むこと

これにもトーマス&ズナニエツキによる以下の註がついている。

\* 導入で我々が述べたように、家族集団のメンバーになっていないテオフィラは、彼女と夫の地位がもたらすもの以上の社会的承認を得ることができない。彼女の夫は、出て行ってしまい、彼女が彼の妻としてはほとんど無意味になってしまっているという認識は、彼女の周囲の行動や彼女の嘆いている行動によって、示される。彼女には、少なくとも若干の社会的立場を保つチャンスが、まだ二つある。ひとつは、彼女の夫の誠実さ——送金、手紙を書くこと、等々——一言で言えば、彼が離れ離れでも彼女との共同利害を守り、この別居生活が一時的なものに過ぎない、彼がきつと戻ってきて彼女をアメリカに連れて行くという証拠である。第二のチャンスは、彼女自身が働くことで個人的地位を手に入れることである。

\* ウラツィアはいとこで、帽子屋あるいは仕立て屋を持っており、ボルコウスキは妻にお針子として働くように望んでいた。

1895.88

Dear Husband: あなたが数か月も手紙をくれなかったことに私がどんなに耐え忍んでいたか、あなたは信じようとしなくてしょうね。私はもうこれ以上あなたの手紙を読まないで生きるのは無理だと思いました。でも、あなたからの手紙を受け取ったとき、嬉しきでしくしく泣いてしまったの。しかし、それを読んだ後では、また悲しみが私を打ちのめしました。あなたは忘れていて、あなたの住所を書かなかったかもし

れないと思いました。でも神様に感謝します。私の重い悲痛や恐ろしい欠落が終わることを私にお示し下さることを。今年はまだドブスカの仕事は全然ありません。それに私はそこでもう針仕事はしません。私はとぎどきズロテイで稼いでいますが、(三、四人一緒の)部屋を借りるのに月に三ルーブル払わねばならないからです。あるときは宿に払うお金がなかったので、私のベッドを取られました。今は借りたベッドで寝ています。さらに、彼らはワルシヤワの診療所費用、年間一人分一ルーブル、を持ち逃げしてしまったのです。私はそれを払わねばならず、もし払わないとあなたが後で四ルーブル払わねばなくなるからです。

あなたの手紙を受け取る前、私は何度か領事館に行き、あなたを探してくれるように、あなたがどうなっているか教えてと頼みました。でも、五ルーブル払うまではあなたを探すとは言ってくれませんでした。しかし消息はわからず私は悲しみにくれたのです。あなた、私の写真に聞いて、あなたがわずか数ルーブル送ってくれるだけで、それを送ることができるわ。お願いです。できるだけ早く私をあなたのところに送って…。

テオフィラ

ポーランドとアメリカに離れたまま夫婦間の手紙と送金は断続的に続き、最後の二通ではこうなっている。

1911.4.20

Dear Husband: あなたに四通の手紙を書きました。どの手紙でも、私はあなたに手紙を下さい、少して

私的に書かれた「語り」を読むこと

私的に書かれた「語り」を読むこと

も言葉をくださいと懇願しましたが、果たせませんでした。そう、私の親愛なる夫、私を哀れんで下さい。私は懇願します、そして少しでもいいからお金を送ってください。おかしな考えが私の頭にこのところ浮かんでいます。あなたに正直に言いますが、それは空腹からくるのです。長い間、私はわずかなお金しか持たず、それも私が借りた借金の数ルーブルと、わずかなズロチだけ。でも、他の人たちはあなたがこれ以上私に送金する気がないと見ていたように、それで私はあえて無理な借金ができず、彼らは私に弁解し、お金を貸してはくれないんです。お願いします。できるだけ早く送ってください。そうじゃないと私はたぶん、命がもたない。イースターに、スリピンスカが私にくれなかったら、乾パンの一切れももらえないでしょう。彼女だって何も持っていない。彼女の子供たちのお恵みによってだけ生きているのだから。

テオフィラ・ボルコウスカ

\*次の手紙（ここでは失われた手紙）で、彼が彼女にいくらかの送金をしたことが示される。

（最後の手紙）

19127.12

Dear Husband: 私を哀れんで下さい。私はすでに裸足で裸ですから。彼らは家賃のためにいろんなものを奪いました。私の頭の下で枕まで。小さな枕一つだけ残りました。哀れんで下さい。愛するウラデック。そしてお金を送って！ 私を飢え死にさせたくないなら。私はあなたが慈悲深く高貴な心をもっているのを

知っています。ひよっとしたら誰かがあなたに励ましをくれるように。なぜ、私はもうこれ以上生きられないの？ 私が苦しんでいるこんな飢えには、もう我慢できないの。そしてあなたに懇願します。愛する夫、哀れんで下さい、私の哀願を聞いて。あなたは神様の次に大事な人、私が毎日祈っていた人。

さようなら。あなた。幸せでいて下さい。

あなたの愛する妻

テオフィラ・ボルコウスカ

二〇世紀の初めの東欧ポーランドと北米アメリカは遠く、簡単に行き来することは難しかったとはいえ、夫婦が十九年も離れて暮らすことは当初の計画にはなかったであろうと思われるが、この事例へのトーマス&ズナニエツキの解釈は、他の農民家族の場合と異なっており、この夫婦がワルシャワの都市生活者だったことと、親族の紐帯が農村部とは異なることに注目する。手紙の前についている解説にはこうある。

#### 夫婦間の通信：Borkowski Series

ボルコウスキと彼の妻は、ワルシャワの中であるいは近隣に多くの親族をもっていたが、双方の家族メンバーはお互いにあまり多くは助け合っていない。連帯の欠如は、ボルコウスキ家の男兄弟が二〇年間彼に手紙を書いていなかったこと、そのかわり手紙は他のものと一緒に保管されていた、ということにつながる。この状況をマルキヴィツチ家で我々がみつけたものと比較してみたい。妻のテオフィラは、彼女の親族が誰一人彼女を助けないという、格別の逆境の中で自分を発見する。親族たちは、彼女との社会関係を、退屈で、

私的に書かれた「語り」を読むこと

貧乏で、みすぼらしい、愚痴っぽい老女として避けようとすらした。

ここには、我々が農村部や小さな町で発見したようなコミュニティで遂行できていたことがもはやない。確かなのは、みんなが知り合いのサークルをもっていて、ここではゴシップ——社会的意見の貧困な模倣——があり、しかし村の住民の間の持続的な関係性や定期的な会合のようなものがないのだ。(周囲の心ない) 社会的意見は、それゆえに小さな力、堅実さ、バイタリティをもっている。

このような条件のなかでははっきりと、結婚はただの個人的出来事になってしまふ。その社会的側面は、宗教的制裁を規定し、婚姻グループとゆるい社会的環境の間の若干の単純な関係を規定する、またこの環境、そして犯罪的行動のレアケースにおける状態の例外的な介入を規定する。このような若干の社会形態によって特徴づけられる大きな限界の中では、誰にとつても大事な、性の異なる二人の個人の間関係が想定する多様性が存在する。この関係の本質は、もちろん成員のパーソナリティに依存するだろうし、彼らの共通の利害関心の領域に依存する。現実の事例では、夫と妻のパーソナリティが伝統に乏しく、文化にも乏しいところでは、彼らのつながりはいくぶん弱くならねばならない。初めの感覚的(肉欲的)魅力が消えてしまつたとき、習慣と日常生活の共通利害関心が唯一のつながりだ。しかし、夫の移民は、この両方を中断し、夫婦の絆の段階的解体が心理的必要性をもたらす。

我々は、この夫がいかなる進化を遂げたのかは知らない。ただ女性側の手紙からそれはたやすく想像はできる。彼は、確かにアメリカで利害関心の新しい領域を見つけた。比較してみれば知的になり、教育がない男だつたにもかかわらず、彼は新しい状況に自分を成功裏に適合させた。ワルシヤワでの彼の生活は、同じ

仕事をしてわずかし稼げず、彼を表現する機会に乏しかった。—— 実際もっとおおく、仕事の多様性や、村の生活が与えることのできる多くの現実的の社会的利害関心がある農民の場合よりも、彼はとても狭くしか世間に登場することができなかった。さらにすすんで、彼はアメリカで、おそらく彼より年上の妻から逃れて、元気を回復したと感じていたと思われる<sup>7)</sup>。

夫側の応答がないので、ある部分は推測になるが、この夫婦が辿った人生と、一九一二年一二月の最後の日付（東欧の政治情勢は流動的で、二年後に第一次世界大戦が始まる）、そしてこれがアメリカの夫のもとにまとまって保管されていたことなどを考え合わせると、この解釈は立体的に浮かび上がってくる。手紙の文面が語るものだけでは、この夫婦が実際にどんな生活を送っていたのか、ある部分は誇張や空想も含み、ある部分は本人も意識しない社会的な圧力が反映したとしても、それはあくまで想像するしかない。しかし、常識的な判断からすればとても理解できないような状況も、手紙には明確に描かれていて、移民という社会現象が、当事者に何をもちたかか統計数値とは異なる、まさに「質的」なりアリティを滲ませて読む者に理解を迫ってくる。

さて、社会学方法論としての問題は、『ポーランド農民』の場合、どこにあるだろうか。生活記録としての手紙は、これが少数の事例とはいわせないだけの数を家族単位で集めていることと、その手紙の内容から移民集団の親族ネットワークの社会関係という焦点化にある程度成功していることにある。

前者については、研究者の手法としての倫理的問題はあるとしても、シカゴ学派の達成したある種強引な社会研究の伝統のようなものの威力を感じる。後者の視点については、二〇世紀の社会学に大きな影響を与えたと思

う。それは二〇世紀初めの、東欧移民が押し寄せたアメリカという特殊な時代を抜きにしては理解できない。一〇〇年前のその時代に生きていた人はもう地上にいない以上、我々はこれを改めて歴史的、いや歴史社会的に読んでみることは意味があると思う。

『ポーランド農民』の手紙はどのように集められたかは、不明だったというが、後に彼らが手紙や手記の多くを広告を出して購入したものであったことが判明したという。<sup>(8)</sup>

その後、手紙を用いたこれだけまとまった研究は出ていない。<sup>(9)</sup>

### 三 日記・社会学の見たいものと文学の表現したいもの

次にここで検討したいのは「日記」である。

「日記」についても、これを研究の「データ」として活用しようという試みは、とくに歴史学や文学ではありふれた方法である。日本ではとくに、日常の身辺雑記を書き記すという習慣が古代から現代まで連続と続いているので、資料としての日記はかなり豊富に利用できる。しかし、社会学にとって「日記」はどこまで「データ」として活用できるのか？ 『ポーランド農民』以上に、生活史研究においても「日記」を用いた研究は乏しい。しばしば言及されるオスカー・ルイスのメキシコをフィールドとした『サンチェスの子供たち』や『ラ・ヴィーダ』<sup>(10)</sup>などは、当事者に自分のことを書き記してもらった生活記録ではあるが、自分が自発的な行為として書いた「日記」ではない。



「日記」という文章の特徴は、書かれた時点が特定されていることである。ある時代、ある場所に生きていた個人が、その時点で感じていたこと、考えたことを間をおかずに書き記すのが「日記」だとすれば、それは「時間」というものの制約と「空間」の制約の個性をそこに帯びている。日付というものは通常は、あまり大きな意味を持たない。人は日常的な世界で、ある場所ある時間に生きて、ものを考えたり他者と一緒に過ごしたり、食べたり眠ったり働いたりしているのだが、その記録は通常他人にとってはほとんど意味のない情報である。場合によってはそれを書く本人にとっても、たんに習慣化している行為だけで、その価値がとくに意識されていない場合も多い。

政治家の日記のように、誰かに見せることを想定して書かれることもあるし、家計簿や予定表のように、となる記録に徹した日記もあるだろう。それも家計研究のようにある時代の経済生活や物価の記録としては貴重なデータであるだろう。しかし、多くの日記は、具体的事実の記録という側面と同時に、そのときそこで書き手の人間が何を感じ考えたかが記されていることも多い。社会学が注目するのは、それがきわめて「個人的」であると同時に「社会的」な語りの記述であるからだといえるだろう。

見知った他者の心を覗いてみたい、という隠微な欲望は別として、通常は本人以外のものに読ませることを想定していない「日記」は、ある場合には歴史の証言になるかもしれないし、それを書いた時点と場所に拘束されていることが、資料としては強みになる例として、ここでは山田風太郎『戦中派不戦日記』一九八五、をとりあげてみたい。山田風太郎（風太郎は後年の筆名。実名・山田誠也）は、戦後日本で膨大な大衆的小説を書いた作家で、この日記が書かれた当時（一九四五年）には、二三歳の医学生であった。これが社会学的に意味をもつ記

私的に書かれた「語り」を読むこと

録であるとするれば、なによりも日本がアジア太平洋で長期間戦った戦争の敗北、という未曾有の一年に書かれた日記であるということだろう。長いがいくつか引用する。

まずは、東京や横浜に空襲のあった後の六月三日の日記。

六月三日

○朝、自転車で行く下目黒の焼け跡へ行ってみる。

途中の電車通りの焼け跡もそうだが、いたるところ罹災者が一坪ほどの掘立小屋をたてて住んでいる。木という木は焼けはてたので、屋根も皆赤茶けたトタン板である。入口には焦げた釜だの土瓶だのがころがり、中に寝ている老人などが見える。

どうしても東京に残っていないなければならない人間、地方のどこにもゆくあてのない人間が、こんな鶏小屋みたいなものを作って住んでいるのだろうか、しかし人間の生活力の凶太さには驚嘆のほかはない。

大鳥神社から清水の方へ——また五反田の方へ、自転車を駈けさせてみると、ただ一望の灰燼、いまさら茫然たらざるを得ない。

とくに五反田、また五反田から目黒へかけての町々は自分になじみが深いので、夢ではないかと思われるほどだ。五反田のごとき、白木屋の建物が一つ残っているばかりといってさしつかえない。駅も焼けて、白木屋で切符を売っている。

これは現実のことなのか。ほんとうに何も無い！ 赤い焦土の上には、ここもまた鶏小屋みたいな赤トタ

ンの塊が、ぼつりぼつりと散在しているのみ。——その中を、陸軍のトラックが群れをなして往来している。陸軍関係の建物が焼けたので、どこかへ引越しをしているらしい。碧い明るい初夏の空だった。日の色はいつのまにか、すっかり白く眩しく変っている。暑い。

自分の以前に住んでいた大崎二丁目のあたりももちろん無い。逋信省電気研究所はさすがに残って、その足もとにコビリついたわずか五、六軒の民家の中に、驚いたことに双松荘が見えた。このボロアパートは残っていたのである。白い干物をかかえた楊石老人の姿も見えた。

白金台町に帰る。電気がやっと動力の方だけ来始めたとのことで、ロクロがゴーゴーうなっている。二人の男工員、三人の女工員が一心に捻子を作っている。二階に上がってみると、おやじは腹這いになって「千種花双蝶々」という変体仮名の春本を、目を赤くして読んでいた。

○ひる、高田馬場へ行っていた勇太郎さんが、目をぱちくりさせて帰って来た。山形県へ行っている間にアパートが焼けてしまって、いつのまにか御自分も無一物になってしまっていたのだそうだ。みなげらげら笑いだす。

○午後、新しい家を探して、二人で世田谷区三軒茶屋へ自転車飛ばす。路々ほとんど焼野原だ。もう東京には、めぼしい、町らしい一劃は存在しないだろう。いつか、東京全部が焼けつくすには二年かかるとか何とか聞いていたが、とんでもない話である。ここらあたりも陸軍のトラックだけがしきりに動いている。

勇太郎さんが心当たりの三軒茶屋の家は、家主が焼け出されてそこに転がりこんでいたので駄目であった。

私的に書かれた「語り」を読むこと

○さあ、弱った。住む家もないが、生活の道具も一つもない。いつまでも高輪螺子に厄介になっているわけにはいかないが、下宿すべき家はどこにもない。第一、蒲団はどうするのだ。書物、ノート、机、鉛筆、それに洋服、傘、下駄はもとより、着替えのシャツ、サルマタに至るまで何にもない。時計、ラジオ、洗濯盆、バケツはおろか、包丁一つ、組一つないのである。いままで笑っていたが、ほんとうに笑いごとではない。

「罹災って、やつぱりあんまりよくないことだなあ」

といったら、おやじは春本からジロリと眼を離して、

「何のんきなことをいってやがる。あたりまえじゃあねえか。焼け出されたら何かいいことでもあるのかと思っていたのか」

と、いった。

焼けたものについては一切愚痴はいわないというみなとの約束なので、ウーンとうなって、ただいたずらにあごを撫でまわす。ただ、いつまでもこうしてぶらぶらしていることはできない。それにまた今夜にでもドカドカと来て東海道線が不通になったら万事休す。

とにかく故郷に帰ってシャツ一枚でももらって来なければならない、と突然発心して、あわてて握飯を作ってもらい、七時過家を出た。

○品川駅のフォームで時間表を見ると、東海道線は小田原止まりばかりで、遠いところへゆく列車は二十時五十五分と、二十三分二十分の広島行きだけである。

十一時ちかくまで、四時間もここで待つ。腹がすいて、いま目と鼻の先で作ってもらった三つの握飯をみ

んな食べてしまった。

午後十時五十五分の列車、すでに満員で来る。

○横浜はまだ燃えていた！

二十九日の朝やられたというのに、三十日、三十一日、一日、二日、三日のきょうの深夜まで、いったい何が燃えているのだろう。

月はまだ昇らず、ただ闇黒の中に、全市灰燼となった残骸が、赤い火をチロチロと、不知火の大海原のように燃えつつ拡がっている。棒杭のような無数の黒い柱が蛇の肌みたいに光って、何たる凄惨、陰刻、蕭殺の景か。——車窓から見て、みな嘆声を發した。

どっと罹災者が乗り込んで来た。この人々のため、空車になっていた最後の車輛が提供された。そこへ入って見ると、大半は負傷者である。丸太のように足を繃帯で巻いた少女、手を首にくくった老人、そして仲間にかつがれて入って来た物体は、ミイラみたいに全身を繃帯で巻かれて、ただ顔面に、眼と鼻と口が四つの小さい黒い穴をあけているばかりで、老人か女か見当もつかない。「可哀そうに、可哀そうに……」という声が聞えた。

○茅ヶ崎で警報。みな車中で騒然となったが、B 29 一機ときいて安心。きょう正午偵察に来た一機は珍しく撃墜したそうである。〔二二二―二二五頁〕

この部分は、彼がその日見たこと、出会った人の様子を並べている。この『戦中派不戦日記』の記述の特徴は、

私的に書かれた「語り」を読むこと

私的に書かれた「語り」を読むこと

この「こんなものを見た」「こんなことをした」という事項の記録を記した部分と、「自分はこんなことを考えた」「自分は今こう感じている」という内面的な評価にふれた文章が併存し、日によってどちらかの比重が交代するところにある。しかも、事実の記録も論説や抒情を述べる場合も、対象に距離を置いて冷静に観察する場合と、思わず昂奮して言葉が迸つてとまらなくなる場合が、絶妙のバランスを保っている。

空襲が激しくなり彼の所属する東京医専（後の東京医科大学）は、長野県の飯田市に疎開している。戦争の終結直前、原子爆弾投下とソ連の参戦という事態の中で、医学生たちも学業どころではない。八月一四日の日記は、長大な記述だが、前半は時世戦況に対する嘆きと政府・軍指導部への批判的論説を書き連ね、後半は戦争終結の動きに対して学生たちが戦争継続のために飯田から運動を起そうという計画に夢中になって、昂奮して語りあう場面が描かれている。その最後の部分。そして八月一五日は、ただ一行のみ。

八月十四日（火） 晴れ

〔十五頁にわたる記述の続いた後の最後の部分〕

何もかも滑稽になり、疲労し、死ぬほど眠くなって来た。夜の思想と朝の思想は全然別物だ、という鷗外の言葉がぼやけた脳を横切つてゆく。

——日本に戦争を続けさせる、などという巨大な運動の、第一歩にも入らないところで、すでに一友人の参加で動揺している。いやになりかかっている。高田の理屈よりも、そんな自分に何が出来ようか。

まぶたが落ちてくる。光は次第に強くなって来る。八月十四日が明けかかっているのだ。朦朧と高田の声

が鼓膜を鈍く震わせる。

「しかしそういう企図自体にはおれも賛成するよ。間に合わないという焦りにも一理はあるよ。……支障がなくて、しかも急速な運動方法がないかと、おれも考えてみるよ」

この言い方の中に、自分は高田が軍師役として呼ばれたとでも考えているような自惚を感じ、何もかもばかばかしくなった。

台所の方で、もうゴトゴトと音がしはじめた。炊事婦たちが朝の食事の準備を始めたらしい。

——熱狂して、一夜魔に憑かれたように国家のことを友と語り合ったことがあった。そういう追憶だけが青春の記念として残るに過ぎないのだろうか？

僕は、悲しいような、弱々しいような、嘲笑うような微笑をもういちど浮かべて、ついに泥のような眠りに落ちた。

○午前高安外科。安西コクリコクリと眠っている。

○飯田の町に鬼気が漂いはじめた。これは半ば取壊した疎開の建物から発するものに相違ない。しかし飯田市全市民、二里外に退去せよという命令のために、そうでない町にも名状しがたい鬼気が流れている。灯のない町に凄味のある半月だけが美しく上がる。

十五日（水） 炎天

○帝国ツイニ敵二屈ス。

私的に書かれた「語り」を読むこと

私的に書かれた「語り」を読むこと

## 十六日（木） 晴・夜大雨一過

○朝九時全員児島寮に参集。これより吾々のとるべき態度について議論す。

滅ぶを知りつつなお戦いし彰義隊こそ日本人の神髓なり。断じて戦わんと叫ぶ者あり。

聖断下る。天皇陛下の命に叛く能わず。忍苦また忍苦。学問して学問して、もういちどやって、今度こそ勝たん。むしろこれより永遠の戦いに入るなりと叫ぶ者あり。

軽率妄動せざらんことを約す。

○中華民国留学生数人あり。その態度嘲笑的なりと悲憤し、酒に酔いて日本刀まで持ち出せる男あり、Kのごとき、真剣にこれを考えて余に手伝えという。断る。せめて死骸の始末を手伝えという。断る。悲憤の剥けどころが狂っているなり。

○東久邇宮稔彦王殿下に大命下る。このあと始末には皇族のほかには人なからん。

○八月十五日のこと。

その日も、きのうや一昨日や、またその前と同じように暑い、晴れた日であった。

朝、起きるとともに安西が、きょう正午に政府から重大発表があると早朝のニュースがあったと教えてくれた。その刹那、「降伏？」という考えが僕の胸をひらめき過ぎた。しかしすぐに烈しく打ち消した。ン本の通り静かだ。空さえあんなに美しくかがやいていないではないか。

だから丸山国民学校の教場で、広田教授の皮膚科の講義をきいている間に、

「休戦？」



降伏？

「宣戦布告？」

と、三つの単語を並べた紙片がそつと回って来たときには躊躇なく「宣戦布告」の上に円印をつけた。きょうの重大発表は天皇自らなされるということを書いていたからである。

これは大変なことだ。開闢以来のことだ。そう思うと同時に、これはいよいよソ連に対する宣戦の布告であると確信した。いまや米英との激闘惨烈を極める上に、新しく強大ソ連をも敵に迎えるのである。まさに表現を絶する国難であり、これより国民の耐ゆべき苦痛は今までに百倍するであろう。このときに当って陛下自ら国民に一層の努力を命じられるのは決して意外の珍事ではない。

「最後の一兵まで戦え」

陛下のこのお言葉あれば、まさに全日本人は歓喜の叫びを発しつつ、その通り最後の「一兵まで戦う」である。これは僕の夢想していたいかなるカンフル注射の幾倍かの効果を現わすにちがいない。

日は碧い空に白くまぶしくかがやいていた。風は死んで、風越山にかかる雲も動かず、青い大竹藪はたわんだ葉をじつと空中に捧げている。玉蜀黍もだらりと大きな葉を垂れて赤い毛がペルシャ猫みたいなつやを放っている。暑い。

……十一時を過ぎると、みなざわざわして来た。時計と広田教授の顔を見くらべては溜息をつく。ついに一人が立っていった。

「先生、十二時に天皇陛下の御放送がありますから、すみませんがもう授業をやめて下さい」

私的に書かれた「語り」を読むこと

私的に書かれた「語り」を読むこと

「承知しています」

と、教授は落ち着いたものであった。

「しかし、まだいいでしょう」

「いえ、ラジオをさくのに遠い者もいますから、どうか。……」

教授はしぶしぶと「薔薇糝糠疹」の講義をやめた。

教授はそのとき果してその御放送の内容を感じていたであろうか。また学生も予感していたであろうか。学生のききたがっていたのは、その内容よりもむしろ生まれてはじめてきく天皇陛下の御声であった。

教授も学生もことごとくソビエトに対する宣戦の大詔だと信じて疑わなかったのである。

一人が例の紙片を書いた張本人をつかまえてやっつけている。

「どうして休戦なんて書いたんだ。今やめれば、サイパンも沖縄も硫黄島もとられっぱなしじゃないか。そんなことになれば大騒動が持ち上る。宣戦布告にきまつてるじゃないか！」

降伏などは論外においたけんまくである。

白日盛りの道を僕達は寮に帰った。道には砂けむりをあげながら、近郷へ家財を運び出す大八車の群がつづいていた。世間は昨日と同じであった。

途中、ふと大安食堂をのぞいてみたら、安西と柳沢と加藤が中でラジオを囲んで座っていたので、僕も入った。

「天皇陛下の御声ってどうだろうな」

「東海林太郎とどうかね」

そんなことをいって四人は笑った。東海林太郎が先日この町の劇場に巡演に来ていたからである。中華民国留学生の呉が入って来て、煙草を巻くから糊の代りに御飯粒をくれとおばさんに頼んでいる。

十二時が近づいて来た。四人は暑いのを我慢して、制服の上衣をつけた。加藤などはゲートルさえ巻きはじめた。

呉は椅子に座って僕達をモジモジと見ていたが、急に風のように外へ出ていった。僕達のやることを見ていて、素知らぬ顔でランニングシャツのままでいるわけにはゆかないし、さればとて改めて空ざらしい芝居をする気にはなれなかったものと思われる。僕は彼に同情を感じた。

加藤の腕時計は十二時をちよつと回った。ラジオはまだ何も言わない。が、遠い家のそれはもう何かしゃべっている。……おじさんがあわててダイヤルをひねった。——たちまち一つの声が聞えた。四人はばねのごとく立ち上り直立不動の姿勢をとった。

「……その共同宣言を受諾する旨通告せしめたり。……」

真つ先に聞えたのはこの声である。

その一瞬、僕は前身の毛穴がそそけ立った気がした。万事は休した！

額が白み、唇から血がひいて、顔がチャノーゼ症状を呈したのが自分でも分った。

ラジオから声は流れつづける。

「……然るに交戦已に四歳を閲し朕が陸海將兵の勇戦、朕が百僚有司の励精、朕が一億衆庶の奉公、各々

私的に書かれた「語り」を読むこと

私的に書かれた「語り」を読むこと

最善を尽くせるに拘わらず、戦局必ずしも好転せず、世界の犬勢また吾に利あらず。……」

何という悲痛な声だろう。自分は生まれてからこれほど血と涙にむせぶような人間の声音というものを聞いたことがない。

「加うるに敵は新たに残虐なる爆弾を使用してしきりに無辜を殺傷し、惨害の及ぶところ真に測るべからざるに至る。而もなお交戦を継続せんか、ついに我が民族の滅亡を招来するのみならず延ては人類の文明をも破却すべし。かくの如くんば、朕何を以てか億兆の赤子を保し、皇祖皇宗の神靈に謝せんや。……」

のどがつまり、涙が眼にもりあがって来た。腸がちぎれる思いであった。

「朕は帝国と共に終始東亜の解放に協力せる諸盟邦に対し遺憾の意を表せざるを得ず、帝国臣民にして戦陣に死し、非命に斃れたるもの、及びその遺族に想を致せば五内ために裂く。……」

魂はまさに寸断される。一生忘れ得ぬ声である。(以下一六頁続くが略) (二二一―二二二頁)

八月一五日には一行しか書けなかった反動のように、翌日の日記はドラマチックな小説のような描写から、天皇の玉音放送、そして鈴木首相の内閣告諭全文や割腹した阿南陸相の遺書までが引用されている。しかし、ラジオ音声を書き写したものであろうが、ここまで正確な文章がその翌日に書けるものだろうか？ おそらく翌日の新聞に載ったものを書き写したのであろうが、実際の日記はノートブックに筆記で書かれたものようであるから、後に出版する際に修正や補足がなされなかったとはいえないだろう。言論統制や怪しげな情報が溢れていた状況の中で、医学生山田誠也は状況に懐疑的なまなざしを投げながら、戦争の推移をかなり冷静に推測していた。

このような文章を書いていること自体、当時は危険視されていたことを考えれば、この日記は友人にも読ませることはなく、密かに書かれていたのであろう。

いずれにしても、国民すべてが命を懸けるつもりでいた戦争が、このような形で終わったという事態は、通常の日常生活世界の平凡な時間の継続とは異なる特殊な状況である。しかし、そのような共同体の崩壊という稀有な共有体験も、その受け止め方は、集団においても個人においてもさまざまであったことをこの「日記」は示している。

注意して読むと、敗戦前と敗戦後の文体上の変化がいくつか発見できる。顕著なのは、一人称から「僕」が消え「余」、あるいは「吾々」のみになり、文章は元々基本的には文語調なのだが、時折混じった口語体が会話部分に限られる。この「余は…せり、曰く云々」という古風な文体と、会話の効果的な生々しさは、この「日記」の魅力でもあるのだが。

十月一日(月) 快晴

○午前中、岡村周諦『生物学精義』を読んだり、リラダンの短編を読んだり。

○午前松葉と二人でまた今宮様裏の城山に登る。今宮神社に「帰還御礼、二十五歳男」と書いた細長い木札が立てあり。

山上の雄渾壮美の大景観。夕日に霞む重畳たる赤石山脈、光そよぐ白すすき、ひろひろと鳴く虫の声。

茶店に寄る。きょう朔日で参拝客多く、茶菓子(漬物なり)なし、売り切れましたと婆さん大いに恐縮し

私的に書かれた「語り」を読むこと

私的に書かれた「語り」を読むこと

だが、梨半分を切りて茶とともに供す。

「悪いなあ……気を悪くせんようになあ、ほんとうにお気の毒でなあ」

と、繰り返しいう。

秋風青く大いなる山上、六畳一間に萱の屋根、土作りの竈に赤銅の大茶瓶かかりて赤き火チロチロ燃ゆ。

白雲悠々去りまた来るの景、われらもいつかかかるところに庵を結びて晴耕雨読の日月を送りたしと、二人ガラにもなき殊勝なる気を起す。

「婆や、お茶くれえ」

と入り来れる一老人に、また茶菓子なきことを詫びたるのち、婆さんひとりごとをいう。

「負けるつて情けないことじゃなあ。のう、こんなことがありますかい。——何しろ今まで負けたことがないんじゃないなあ。……昨日の新聞の天子様のお写真はとうです。あの、敵の大將と一緒の……お可哀そうになあ、あんまりウツリもよくないに。……」

一円置きて去る。

山上の草の上に伏して蒼穹を長時仰ぐ。視界の底の赤松の緑眼醒むるばかり鮮やかなり。絵のごとく鮮やかに美しと吾らは形容す。しかれども自然ばかり色鮮やかに美しきものはあらじと痛感す。盛夏去りて秋風立ちそめたり。この緑、この光、この盛り溢れ滴る自然の青緑の豪華は、自然の最後の饗宴といふべきか。

うろこ雲、静かに光りつつ動き、寂寞と消ゆ。

「吾に痛切なる悲しみいな。八月十五日の涙すでに消えたりや。人間の哀歎空しきかな」

と、松葉はいう。

「さなり。また、さにあらず。かの痛みは去れど創痕を吾人の魂深くとどめたり。無意識ながらも、その創痕永遠に消ゆることあらず。これ吾らの運命なり。——いま幼児また後に生まれんとする子ら、新しき教育受けて吾らのこの執念を時代遅れと笑うべし」と余いう。

「さらば吾らもすでに時代遅れとなりたるか」

と松葉嘆き、二人大笑す。

松葉、白秋の邪宗曲秘曲など朗吟す。余は、この詩は——白秋の詩の大部分なれど——吟する詩にあらずして見る詩なりと思う。この一連の詩曾て陶醉せり。今は何の感動もなし。馴れたりという理由もあれど、あたその理由が尤もなるほどに、これは単なる幻想的異国的の言葉新しき語の魔術に過ぎざるゆえにはあらざるか。されど白秋の『思い出抄』の中「梨」の一編の、余が中学時代の幼き魂に印したる感動は今も生き生きと波打てる感ず。

本戦争のこといろいろ考う。

今、日本は完全なる罪人となれり。悪なるがゆえに破れたりと全世界より断ぜらる。されば戦争中の宣伝に関して、その荒唐なりしを笑われるれど、明白なる敗戦の一因は、宣伝戦の未熟なりしにあらざるか。敗る以前すでに日本は世界の敵と目されたり。余は国家間のいわゆる正義を認めず。負け惜しみにもフテクサレにもあらずして、国家間のいわゆる正義なるものは、実に浮雲のごときものと思うなり。而して日本は敗

私的に書かれた「語り」を読むこと

私的に書かれた「語り」を読むこと

戦以前すでに連合国側の龐大なる宣伝機構に圧倒されいたるなり。

また戦争中の吾らの思想について想う。

戦争中われらは、日本は正義の神国にして米は凶悪の野蛮国なりと教えられたり。それを信じたるわけにはあらず、ただどうせ戦争は正気の沙汰にあらざるもの、従つてかかる毒々しき、単純なる論理の方が国民を狂氣的決闘にかりたてるには好都合ならんと思ひて自ら従いたるに過ぎざるのみ。

また吾らは、戦後の日本人が果して大東亜共栄圏を指導し得るや否や疑ひたり。(戦争に負けるとは思わざりき。これ確信ありて敗北を思わざりしにあらざりして、これを思うは耐えがたくして、かつそれ以後の運命を予想し得べくもなきにゆえに、われと目を覆いて必勝を信じていたるなり) さて勝つとして、日本人が、アングロサクソン、ソヴィエット、独、伊の各共栄圏の各指導民族と比して、果して遜色なきやと疑ひたり。これ単なる科学力文化力のみをいうにあらず、その人間としての生地の力量に対する不安なり。詮じつめれば、日本人の情けなき島国根性なり。しかれども、吾人はこれに対してもまた、本戦争にともかくもガムシヤラに勝たば、而してともかくも大東亜共栄圏を建設して、他の指導民族と角逐すれば、これに琢磨されて島国根性一掃され、闊達なる大民族の気宇おのずから養われんと思ひいたるのみ。

数十年後の人、本戦争に於て、われらがいかに狂気じみたる自尊と敵愾の教育を易々として受け入れ、また途方もなき野心を出だしたるを奇怪に思わんも、われらとしてはそれ相当の理由ありしなり。

五時前山を下る。

夜、この六日、学生が大松座を借りて飯田市民を招待し、素人芝居をやらんと企図に應ずるため、出演



者の選択やプログラムの編成に関し相談会あり。〔四一七～四二〇頁〕

改めて現象学の視線からこの「日記」をみると、自分の日々経験している日常生活世界と、戦争という経験的世界を超越した大状況、それを語ることは妄想的で構築的なドクサに陥るような、つまり人殺しや飢餓の現場としての戦場と、戦争の大義や玉音放送の声音のような言葉の接点がみつからないという問題が立てられる。平和な市民生活が維持されている社会なら、通常は世界はそこまで緊張していないから、それは別々のものとして存在していて、人々はおそらく日常生活世界を見て生きていることを不思議とは思わない。しかし、一九四五年八月の日本では、現実に行っていた事態と、人々が生きていると思っていた世界とが見事に物理的にも精神的にも亀裂を露呈したので、生き残った人々は絶望感と混乱の中にありながら、同時に解放感や皮肉な愉快すら味わっていたことをこの「日記」は記録している。

さて、社会学における「日記」の利用という点で、ここでは現象学をそのまま使うのではなく、村上陽一郎の『科学と日常性の文脈』<sup>(1)</sup>（一九七九）にある「文脈依存性」および「日常言語」と「理論言語」の区別という概念を借りて、社会学が「日記」をどう料理できるかを考えてみたい。村上は近代科学が作りあげた正確で一義的な「理論言語」と、人々が日常生活世界で使っている「日常言語」を対比させて、このような説明をしている。

すでに述べたことから得られる自明の区別は、言わば「日常言語」と「理論言語」の定義に由来する特徴

私的に書かれた「語り」を読むこと

でもある。それは、これらの言語系を共有する「共同体」の大きさの問題である。日常言語の内実をどのように捉えるのであれ、これまでの記述の筋道に従えば、それを共有する「共同体」、すなわち「われわれ」と呼んできたものは、最も規模の大きな共同体である。この共同体——いかなる言語圏、いかなる文化圏における共同体であるかは問わず——に属しないで、人間としての「われ」はどのような形においても存在しない、という意味で、すべて人間は、この種の共同体の一員である。「日常言語」とは、そうした共同体において成立している言語であり、そうした共同体を成立させている言語でもある。

他方、「理論言語」を支える共同体、「理論言語」が成立させている共同体は、そうした日常的共同体の内部に包含されている、より小さな共同体であると言えることができる。繰り返すまでもなく、そうした共同体の構成員としての一人一人の個人は、日常的共同体としての「われわれ」の一員である「われ」であると同時に、「理論言語」を介して生れるより小さな共同体としての「われわれ」の一員である「われ」でもある。第二に、「日常言語」においてもちいられる概念、用語に関しては、すでに一瞥した如くその意味規定は曖昧であり、多義的である。例えば、「ムシ」という日本語は、単に昆虫のみならず、甲殻類などの節足動物全般から、場合によっては腔腸動物や原生動物、あるいは逆に爬虫類などまで、きわめて曖昧な適用範囲をもっている。それは豊富な「孕み」をもっており、さらに、それを成り立たせている他の概念群との間の有機的連関も、多義的、曖昧、陰伏的である。

これに比較して、「理論言語」における用語は、その用法と、他の用語群との間に成立する有機的連関とが、比較的はつきりしており、一義的、と呼ばれ得る状況に近く、ときには完璧に明文化されてさえる。

このことは、別の言い方をするとこんな風になる。ここですでに導入した「潜性」(disposition)の概念をもう一度考えてみよう。第一章で述べたように、潜性とは、例えば「砂糖の白さ」という性質に対する「水溶性」といった性質を指すことになっている。砂糖の「白さ」は、見れば判るが、砂糖の「水溶性」は見ただけでは判らない。砂糖の「水溶性」は、砂糖を水に漬けてみる、という特定の状態もしくは条件下に初めて、見れば判るものとなる。言ってみれば顕性化される。そこでこの「水溶性」のような、ある特定の条件を規定されたときに初めて姿を現す性質を「白い」というような通常の性質と区別するために、「潜性」という言葉が使われたのであった。

実はこのような区別は、単に便宜的なものに過ぎないものであることも第一章で指摘した。何故なら、砂糖の「白さ」と言っても「通常の可視光線の下で、通常の視覚を備えた人が見たとき」に初めて、それは見れば判る性質となる、つまり顕性化されるのであって、その意味では、「白い」もまた、立派に「潜性」ということができるからである。それゆえ、通常の「性質」と「潜性」との間の区別は、実体的 substantial な意味を持たないことには気をつけておかねばならない。

むしろ、もっと積極的な言い方をすれば、ある言語系内のあらゆる用語は、すべて、「潜性的」なのであった。第一章での「文脈依存性」という概念はそこにも立脚していた。「灰皿」はある文脈のなかで、ある「場」のなかで、初めて、「灰皿性」を露わにする。つまりは、しかじかの条件の下で、初めて「灰皿」は「灰皿」である、というこの事実が、「灰皿」が「灰皿」であることもまた、「潜性」の定義に叶うものであることを示しているのである。<sup>12)</sup>

「語り」の文脈を形づくるのは共同体の「日常言語」の自明性、成員にとつては言語化する以前に自明な、しかしどこまでも曖昧で多義的な概念を含む言葉である。『戦中派不戦日記』に記された言葉の半分は、見れば判らないが厳密で一義的な意味をもつ狭い共同体の言葉を使って、世界をなんとか捉えたいという強い欲求を示している。それは硬質な文語体の属する世界、日本の伝統文化のなかで知的エリートを指向する「理論言語」への指向を示すのだが、空腹や貧乏という物理的困難以上に、彼の苦悩の中心は「理論言語」を通じて対話できる確実な共同体を、この破滅した国家のどこにも見出していないという焦りにある。しかし、この日記はきわめて冷静に、目の前の人々の「語り」を収録している、という点で社会学的である。

十二月十七日（月） 雨

○午後二時山陰八鹿着。バスを待ち四時家に帰る。暗澹たる冬空の下に群嶺の雪冷たくひかる。刈田、水藻に青く寒し、夜雪。

○汽車バス中の物語断片。

比島よりの復員兵の話。

「わたしたちは内地に帰って決して歓迎されるなんて、夢にも考えてはいなかった。しかしです。こうまで冷たいとは思いませんでした。浦賀に帰って来てはじめて聞いた声は、何だ案外肥つとるじゃないか、という言葉でした。わたしたちがフィリップンで何を食つとったか知つとりますか？ 東京へ行く電車の中で、

若い女が背中のかかん坊に、ほらあれが捕虜だの敗残兵だと教えとりましたが、わしたちは降伏したんじゃないんです。五年でも十年でもやるつもりで山に立籠もったんです。ロープばかりでよじ上らねばならんよな山の中に陣を築いていたんです。先に参ったのは内地の方じゃありませんか。日本が降伏したときいてもわしたちはほんとうにはせなんだものでした。後になって命令によってやっと下山していったんです。わしはその女を殴り倒してやるうと思つたが、いやいや折角命あつて帰還したんじゃないからと胸をさすつてがまんしました。東京のあの女たちのザマはなんですか。アメリカ兵と手をつないで歩いている女どもに、フィリッピンで片腕や片足を失つた、いや死んでいった戦友たちの姿を一目でも見せてやりたい」

前の座席に座っていた女の人の話。

「兵隊つて可哀そうなもんですねえ。終戦前、私の家の近くに部隊が駐屯してしまつてね。その中将校さんたちつたら、朝から晩までお酒をのんで騒いでいるんですよ。それあのに兵隊さんたちは、朝、昼、晩、こんな小さなムスビ一つづつなんですよ。初め近くの畠を荒らす者があつて、そのうちそれが兵隊さんだつてことがわかつたんですがね。一日中材木をかついだりシャベルで穴を掘つたりしてるんですよ。それなのにあんなムスビ一つづつじゃあんまりひどいつて——何もこちらはいわなかつたですよ。よくうちへもやつて来て、色々食べさせてやりましたがね、何とかしてあげなきゃ見ていられませんよ。兵隊さん、炊事にはなるべくお焦げをたくさん作るんですつてねえ、それを自分たちで食うらしんです。それで将校さんたちの兵隊さんを殴つたり蹴つたりするつたら、そりゃむごたらしい。うちの子もあんな目に合っているんだらうか、ああああ兵隊にややりたくないもんだつて、みんな身につまされてましたよ」

私的に書かれた「語り」を読むこと

私的に書かれた「語り」を読むこと

特攻隊生き残りという青年の話。

「軍隊もなかなかいいところがあるんですがね」

姫路の若い男の話。

「チャンコロや朝鮮のやつら、シヤクにさわりますなあ。いま列車でどんどん帰国してらしいですな。それが駅に停ると、ワツとばかり飛び出して駅前の店やマーケットを襲って略奪してゆくんですよ。何しろ何百何千つてんだから、警察も手が出せない。みんな血の涙流してくやしがつてるんですがね」

老人の話。

「今年や悪い年でしたなあ。戦争にまける歳なんていいことのあるはずがないが、大雪、風は吹く、長雨はふる、地震は会う、大根なんて——あんなものでも、ことしはいくら面倒見ても、こんなにか実が入らなかったですな。負けるなんて、実際何ちゆうこつてすか、日本が負けるなんて、お上が勝つつちゃ、てつきり勝つつちうことに——うんにゃ、戦争すりゃ勝つことに決めていたもんですがな。ひどいことになりましたなあ。まるで地獄ですなあ。負けて、三か月、せめて半年くらいの辛抱じゃ、みなそう思っただいじつとがまんしていたんですがな、まだこのありさまじゃ、こりやもうみんな死ぬよりほかはない」〔五一七—五一九頁〕

この記述は、東京を離れて岡山の実家に向かう途中の車中で出会った人々の言葉を、そのまま拾って、いつものような論評を一切加えていない（付記・ここには今日差別用語とされる表現があるが、歴史的記録として原文

のまま引用した)。敗戦後の現実をその人なりの解釈を加えて饒舌に語る人たち。それはまるで虚実取り混ぜた語りを採集した中世の説話集『今昔物語』のようでもあり、またオスカー・ルイスが採用した「羅生門スタイル」、つまり敗戦直後の日本社会のさまざまな側面を、複数の語り手のそれぞれ異なる視点で浮かび上がらせる手法に近いものがある。それはもちろん医学生というよりも、後年人気小説家になるこの書き手の才能によるところが大きいのだが、「日記」という形でその文章の作為性は少ないと考えてもいいのではないか。

ただ、この「日記」を歴史的なある一時点の生活記録として読むか、むしろ文学的な自己表現作品として読むか、が問題である。それは書かれたテキストそのものが意図しているわけではなく（後年作家になった人間が書いた日記であっても、書かれたときの動機はもっぱら自分のためだけの記録だった）、読む者の態度と村上陽一郎のいう「日常言語を成立させている共同体の文脈」にかかわるだろう。あの戦争を直接には経験していない者には、すでに戦後の日本が平均的に形づくって来た戦争時のイメージのステレオタイプ（言説空間）が内面化されている。それは歴史認識としての「理論言語」によって構築されていたのだが、「日常言語」の「語り」をフィクションとして、あるいはフィクションに近い形で言語化・文章化する文学作品とその鑑賞は、それゆえに多義的で曖昧な解釈が許される世界である。しかし、社会科学としての社会学という立場から「日記」を扱うとすれば、意識的に「日常言語」をその時点の「共同体の文脈」に沿って読まなければならない。と同時に、「理論言語」から導かれる仮説に適合的な部分だけ抜き出して、これを「理論言語」の材料に変換することの危険にも慎重であるべきだろう。

#### 四 応用問題 ある手記

あるときある場所で、現にそこに生きていた一人の人間が、ある出来事を個別的に体験する。その体験の内容と記憶は、ほとんど無限に揺れ動く多様性を孕んでいて、ほんのちよつと前、三〇分前の出来事すらも、変化する現在の前で過ぎ去っていく記憶に変わっている。われわれが生きている社会に「動かしがたい現実」というものがあるのだとしても、われわれが捉えることのできるのは、十九世紀的客観主義・実証主義的な、唯一の現実というようなものではなくて、物事のある側面がある視点から眺めてそこに見えてくるものにすぎない。それはその当人にとってすら、一貫した不動の体験などではなく、多様で曖昧な、つねに確認しなければ消えてしまうようなものである。

「日記」も「手紙」も、ある出来事が生起しているリアルタイムの経験ではなく、それがおこった後で（たとえ一分一秒後でも）、反省的に想起して書かれたものである。あるいは、その行為の現在は文字を書いているという時点であって、書かれた語りの内容はつねに事後的、場合によっては遠い過去や、ありえなかった夢想すらありうる。「インタビュー記録」のように、インタビュアーがある出来事についてインタビュイーの想起を引き出し、そこに特定の事実の証言や検証を求める、というのは、少々無理なことをやっているのではないか。一義的尺度で測定した数字数量データの場合と異なり、「自然言語」の「語り」である限り、恣意的な読み替えや変換が避けられない。そこにむしろ積極的な意義を見いださうとする生活史研究は、「語り」をそのまま提示す



るか、それに一定の解釈を与えるか、あるいは切片に切り刻んで再構成するか、どのような処理を施すのか？

ここまでかなり長い引用を通じて、「手紙」と「日記」の具体例を追ってみたのだが、もうひとつ「手記」あるいは「自伝」に属する「語る文章」をあげてみたい。これはごく最近書かれたものである。二〇一一年三月の東日本大震災の被災地の一つ、宮城県気仙沼市のある企業の従業員（工場長）で、津波の被害で自宅を流され、妻と両親を失ったK氏の「手記」である。この場合も、大災害の被災者という、平凡な日常生活の中ではありえない特殊な事態の中で経験したことを、少し時間をおいた時点で反芻しながら書かれたものである。「日記」ではないが、大震災発生時から数日間の出来事を、できる限り念入りに記憶をたどって書かれている。

### K氏の手記『追想』<sup>13</sup>より

三月十一日の出来事1（会議中の食堂で）〔2011.06.20記〕

二〇一一年三月十一日、十四時四六分。私はじめ幹部（本社機能除く）は、食堂にて、月一回の定例である「課長会議」の開催中に大地震に遭遇しました。

食堂は工場のなかでは、長机と椅子しかない様なところですので、遭遇した場所としては比較的安全な場所での遭遇でした。

しかし、これまでに経験したことのない揺れの大きさと長さ……。揺れている最中に蛍光灯が消え停電になったことを認識し、本来であれば、そのまま収まるはずですが、更に揺れが大きくなり、食堂に設置したばかり

私的に書かれた「語り」を読むこと

私的に書かれた「語り」を読むこと

りの、地デジ対応の42インチの薄型テレビが今にもテレビ台から落下する様な暴れ方の勢いに、逃げることも出来ず、その時の私の行動はテレビを押さえて落下を防ぎ、揺れが収まることを待つしか出来ませんでした。

宮城工場は年一回、初冬に防災訓練を行っています。この二年位は、地震も想定した訓練を行っており、社員の揺れが収まってからの行動は、訓練そのものでした。

火もと点検・始末を行ってから、全員がトラックターミナル前に集合し、各部門毎に点呼を採り、総務課長に部門毎に全員無事であることを報告、全ての部門・社員が怪我等なく、無事が確認できた時点で私に報告があり安堵しました。

訓練であれば、その後、訓練結果の総評を行い、自部門に帰って仕事を再開するのですが、今回の大地震では、訓練では予想していなかった事態に遭遇し、その判断。指示が、工場責任者としては、その後、精神的に追いつめられる結果となったのでした。

「こんな状態で仕事は出来ない」「家族が心配だ」「大津波警報が発令した」等の意見があいつぎ、帰せコールになったのです。

この記録が貴重なのは、ある一日の出来事を三か月後に丁寧に繰り返し確認するように回想しているところにある。人は通常、一日の出来事をすべて記憶しているわけではない。とくに印象に残ることがなければ、大半は時間の経過と共に忘れていく。ところが大震災と大津波という激烈な出来事が起り、その後の非日常的世界を生

きることになったK氏は、精神の動揺や避難生活上の対応に追われた後、やや落ち着きを得たときから、あの一日についての記憶をたどってこの文章を書きはじめる。K氏は職場の管理責任者という立場にあったので、まずは自分の職務上の判断を回顧していく。

### 三月十一日の出来事2（帰せコール）

「こんな状況で仕事はできない」「家族が心配だ」「大津波警報が発令した」等の意見があいつぎ、帰せコールになったのです。

確かに、大震災以降は停電したままです。仕事は出来る状況ではありませんでした。しかし、すぐに帰して良いのかどうかの判断は悩みました。

私たち、地元の人達は、大きな地震＝津波の連想は、これまでの伝承・教育、経験からは容易に想像出来ず。

私としては、津波襲来に対し安全なこの工場から出ることは、非常に危険だと思っていました。が、家族を思う帰せコールを押さえられることが出来ず、短期に決断した結果は、帰っても良いが以降は自己責任・判断にてという様な言葉だったと記憶しています。更に、国道を通ることは危険だぞ！まで言った記憶があります。

この時点で、正直、私には、家族が心配、帰らなければとかの考えはなく、とにかく、現状を把握し本社に連絡しなければ！しか考えつきませんでした。

私的に書かれた「語り」を読むこと

私的に書かれた「語り」を読むこと

更に言えば、津波の連想は出来たとしても、まさか、我が家が流出する様な大きさの津波が襲来することは予想すら出来ませんでした。

「帰る際に総務に連絡してから帰る様に」との呼びかけも行った記憶がありますが、事態は深刻で状況が刻々と変わり、一度、国道に出かけた社員が、鉱山跡地の土石流や津波に遭遇し戻ったり、その後、山道へ迂回して帰路にトライした社員がいるなど、結果的に誰が、いつ、帰路についたか？把握すら出来ず、時間が経つにつれて、社員の数はどんどん減っていくのでした。

本社、家族に連絡が取れない。固定電話は停電につき不通、頼みの綱が携帯電話になるのですが、今回、携帯電話ですら役に立たない状況を目の当りにしたことはありません。別途、記述しますが、携帯電話であれ、通信と電気の密接な関係を改めて実感した大震災でした。

まずは外部との連絡を取らなければならないが、携帯電話、固定電話が役に立たないという事態に大きな不安が高まっていく。そしてテレビが伝える各地の津波の映像。

### 三月十一日の出来事3（津波の映像と携帯不通）2011.06.27記

とにかく、連絡がつかない、状況がつかめない。

そのような中で私の行動は、駐車場から自分の車をトラックターミナルに移動し、エンジンをかけながら車のTVでNHKのニュースを見ることでした。

画像の順番は違っているかも知れませんが、目に飛び込んできた映像は、

1) 仙台市か亘理町か定かではありませんが、仙台平野に津波がどンドン襲来し、家や車などを呑み込み、がれきと共に田畑を喰いあさっていく映像。

2) 気仙沼湾の魚市場付近でフェリーがまるでおもちゃの様に航行不能状態で津波に流されている状態。その奥には、商工岸壁にあるはずの丸井石油タンクが流されている映像。

3) 気仙沼湾の一番奥の船着き場にある市営駐車場の3階まで津波が押し寄せ、その上の屋上に人が立ち往生している映像。

特に2)3)の映像は見慣れた地元のショックな映像でしたので、「ウソだろう！ えー！」って言葉に出たかどうかは定かではありませんが、絶句と共に、初めて、家族、社員の安否が心配になり、K次長とかと、携帯電話での家族や本社への通話トライが続くのでした。

大震災直後の携帯電話の不通は、電話を掛ける人が殺到し、電話会社が回線を規制したことによるケースで、震災地だけでなく、多くの国民が地元や家族や知人の安否を確認したくって経験したことだと思います。

その状態であれば、粘ればつながる可能性はあります。

実際、大震災直後、本社にも何度か通じ、社員を帰した等の簡単な報告を行った記憶がありますし、女房の携帯にも何度もかけた結果、「混み合っているのでおかけ直し下さい」のコールではなく、時々、通話を試みて、「電波が届かないところか電源が入っていない」のコールになった時があり、その時は、「まずいか

私的に書かれた「語り」を読むこと

も：」と最悪の状況はよぎったことを記憶しています。

まだ、この時は粘ればつながるとの感覚しかなく、粘ってつながった人は、家族等の安否も確認出来た人もいると思います。

しかし、その後、陸の孤島と化し、更にはガソリンが手に入らず、通信の妨げになるとは、ほとんどの方が予測できなかったし、被災地から離れている方は、被災地でどのような状況に陥っているかも把握できなかったと思います。

ガソリン、電気、交通の寸断、寒気への対応、なによりも携帯電話の再開にしろうじて期待をつなくK氏。しかし、携帯電話のアンテナは立たない。

#### 三月十一日の出来事4（携帯電話と電気）

時間が経つにつれ、周りが暗くなってきた中で、携帯電話がつかない新たな問題に直面してきたのです。

携帯電話のアンテナが立たない状況になってきたのです。

電話をかける人が殺到し、携帯電話会社が回線を規制だけであれば、アンテナが立てば、電話は無理だったとしても、メールとかでのやりとりも出来たはずですが。（私も残された家族とは当日でも多少メールのやりとりできました）

私の携帯は docomo ですし、工場の携帯（グループ間は一定料金）も、docomo で契約しており、ある時、工場内は docomo のアンテナが弱い特上を出したところ、会社の目の前に、まるで当工場の中継局を設置してもらった経緯があり、docomo の携帯はバリ3状態だったのです。ところが震災から時間が経つにつれ、アンテナが立ちづらくなり、ある時間帯は、唯一、事務所前の受水槽付近の1か所のみ、弱い状態ながらつながる状況でしたが、寒さも厳しくなり、そこに立っていること自体つらい状況になり、会社のステップワゴンをそこに移動して車内で試行してみたりもしましたが、窓を閉めただけで圏外になる様な弱い信号レベルだったのです。

考えてみれば、携帯電話の中継局だって電気で機能しているのです。中継局の規模によっては、蓄電池等で長時間は機能していた中継局があり、工場の目の前の中継局はあつという間に機能を失い、もつと離れていた中継局に電波が弱い状態でつながっていたと思われれます。

ここまで記述すれば想像できると思いますが、停電復旧の見通しが全然立たない状況下、工場で唯一つながっていた場所においても、圏外になるのは時間の問題でした。

更には、携帯電話の充電切れ！ 停電状態につき充電が出来ない！

確か、車内にシユガーライターから充電出来る充電器があつたはず！ 調べて探しましたが…。「アー、女房の車か！…」

このような震災時、電池とか車から携帯電話に充電できる充電器が必需品であることを思い知らされました。（但し、アンテナが立たなければ意味ありませんが…。）

私的に書かれた「語り」を読むこと

比較的高台にあるK氏の勤務先と海に近い自宅は1・5 kmほどの距離で、さほど遠くはないのだが、海岸方面は津波の危険で近寄れず、車で動くのも控えた。なにより、K氏には工場を預かり従業員たちを保護する責任が優先していた。だからこそ、家族との連絡は携帯電話がつながることだけが希望だった。この時点で、自宅が津波に流されているとは想像もしていない。海に近いといっても、海岸からは離れた場所で土地も少し高くなった場所だからだ。

### 三月十一日の出来事6（避難場所での一夜）

三月十一日に戻ります。

暗くなり、小雪が舞うきびしい寒さ、継続的に余震が続く中、当工場の避難場所として、正面玄関を入ったロビー（すきま風が入るが直ぐに外に避難できる場所）がおのずと避難場所になり、食堂の椅子や机、石油ストーブ、毛布等を準備し、一夜を過ごすことになりました。

社員が残ったのは十名いなかったと思います。近所の方々が場内の車の中や外で避難している方もいて、その方々もロビーに案内しました。それでも若い方は車内で、お年寄りの方々がロビーに避難したと聞いています。

暗くなる前に、災害時の非常食をロビー付近に準備しており、女性社員が手際よく、暖かいコーヒーや非常食の炊き出しを行い避難している方に提供し、長〜い、暗〜い、寒〜い、一夜が始まるのでした。

後で聞いた話ですが、初日、二日目あたりの一夜の避難状況は避難場所によって雲泥の差だったらしいで



す。

当工場の避難場所はすきま風は入るも、暖をとることができ、食事も不自由なく取ることができたのです。

陸の孤島化（海水が引かない）した避難場所においては、本来の避難場所であっても、避難用物資が津波で流出したりで、津波に遭遇し紙一重で生きのびても、津波で濡れた衣料を着替えることも出来ず、食事もままならず、せつかく地震、津波で生きのびても、高齢の方々の中には、あの厳寒の中、体力・気力が追従できず、その後に避難場所で亡くなった方も多かったと聞きました。

工場の中で一夜を過ごした社員において、避難所として唯一の欠陥は家族の安否の確認ができなかったことでした。そのような中、社員のM母子と犬一匹が、無事が確認できた家族として避難していました。

M君が母を捜しに山道経由で自宅付近まで行き、偶然的にもその日に犬と一緒に避難した母を見つけ、工場に避難してきたのです。

その当時、まさか私が五月の連休まで、M母子においては七月上旬までという長い期間、当工場での避難生活が続くとは夢にも思わなかったことでした。

不安のうちに避難した従業員家族とともに工場のロビーで一夜を過ごしたK氏は、翌朝、意を決して連絡の取れない自宅に徒歩で向かう。

私的に書かれた「語り」を読むこと

### 三月十二日の行動3（予想を遥かに超える津波）

自分の目で確かめるしかない！

車でどこまでいけるか分からなかったし、避難所の中学校から自宅までは1・5 km位の距離なので、徒歩で向かう途中、近所で仕出し料理を営んでいる同級生に会い、家族は中学校に避難し無事だったが、自宅も店も流され、跡形もないという話を聞きながら、国道を横切り、岩井崎（吹き上げ岩で有名）、御伊勢浜海水浴場の方向に向かうのですが、JR気仙沼線の踏切を渡る時、南側（工場がある本吉側）の線路が津波で流失している光景を見るも、その後の明戸町（この地名はいずれ後で出て来る予定です）の直線道路の両側の家は何ら普段と変わらない光景に違和感を覚えながら自宅を目指すのですが、その直線の半分位から津波によるがれきが見えはじめるも家は残っているのです。

ところが、直線が終わり緩いカーブを過ぎれば我が家、あと300 m位のところに瓦屋根の半壊した家が道路のど真ん中に陣取り……。大人になってからは歩いたことがないガキの頃の遊びに使った裏道をがれきをかき分けながら進むと、光景が一変しました。

あるべき家がほとんどないんです。あっても一階は無残な状態、そして、海が近いんです。今まで家が沢山あったところが、がれきと海というか泥沼というか、その中で向洋高校と全漁連の倉庫だけが異様な姿で持ち堪えていた光景でした。

この時点で、我が家も流失している状況は認識したのですが、信じることができず、本来、車で我が家に行く市道も流失し、水も引いていないので、裏を通り、瓦が散乱している近所の畑を通り、自宅（の基礎し

か残っていない)へたどり着きました。あるべき物が何もありません。そしてある訳がない物があるんです。我が家の庭に、小型の漁船がひっくり返っているんです。

「おらいまで(津波が)きたら気仙沼は終わる」とよく言ってたんですが、それが現実になってしまったのです…。

「Y子! (女房の名前)」 大声で何度も呼んで見たのですが、聞こえてくるのは、生活感のない異常な静けさ中でのウミネコの鳴き声だけ…。

こういう時って、両親には申し訳ないのですが、大切な人の中でも、一番大事な人が優先されてしまうんです…。

我が家周辺の状況及び家族が地元の避難所に避難していない…。

絶望感が増す中、避難所に戻り、更に知人に手がかりを確認するも、手がかりなし。無事だった近所の方々の確認が出来る一方、行方不明の近所の方々の情報も刻々と入り、頭が整理されない状況下の中で、決断したことは、女房の実家に連絡を取らなければ!でした。

女房の実家は、一関市(旧室根村)で、我が家からは約三〇km離れている山の中にあります。

自宅と家族が流された跡を見て、茫然自失したK氏は気を取り直して、避難所に家族が避難していることを期待して探すが、みつからない。そこで妻の実家に向かう。

私的に書かれた「語り」を読むこと

### 三月一二日の行動（実家での出来事）

工場に戻る際、山道のルートを変え、大谷小・中学校付近の伯母（父の妹）の家に立ち寄り、伯母の家はギリギリで津波の被害を免れてあり、簡潔に家族が見つからない旨を話し、暖かい飲み物をご馳走になって出る時に、これ持って行け！ って手渡されたのが、レバーをクルクル回して携帯電話に充電する充電器でした。

これは助かる！ ってお礼し工場に戻り、M君に、室根の実家に行き泊まってくるかも知れない、と留守番をお願いし、女房の実家に向かうのでした。

本吉町津谷を通り、道路はどこどころ凸凹はあるものの、普段の風景と変わらない道路を走り、実家に三〇分位で到着しました。

直ぐ、庭先に義姉がいるのを見つけ、寄っていくも不審者が来た様な警戒顔（多分、髪ボサボサ、無精ひげだったから…）だったので、気仙沼のK！ って叫んではじめて、私と認識してもらい、今考えれば、いままですたこともない、義姉と自然に抱き合い、良かった！ 大丈夫だったんだ！ の泣き声に、辛い事実を伝えなければなりませんでした。

申し訳ね〜！ Y子が見つからない。じいちゃん、ばあちゃんも… その瞬間、義姉の体は脱力感というのか、崩れ落ちそうになり、泣き声が大きくなり、私は涙を堪えて、お姉さんを抱き支えていることしか出来ませんでした。どの位の時間が経ったでしょうか…。

お姉さんも正気に戻り、自分の足で歩ける状況になり、庭先から自宅の中に入ろうとした瞬間、私の携帯

のメール受信の音声は鳴ったのでした。九〇歳に近い義母への挨拶もそこそこ、携帯のメール受信の音声は私の頭脳を仕事モードに切り替えるのでした。

メールを受信したということはアンテナが立つ場所があるということ、工場で経験したように、庭先のあの地点のみ弱いですがアンテナが立ったのです。

早速、本社の常務に連絡するも、途中で携帯電話の電池切れで中断……。クルクル充電器は回すも中々蓄電できず、直ぐに電池切れの状態。

その時、近所のおじさんが尋ねてきて、奥さんが南三陸歌津で介護の仕事をしているが消息がつかめず、手がかりを求めて来たとのこと。

平成の森であれば、あそこは高いですから大丈夫だと思いますよ、ちょっとこれを回してもらえないですか？ ってお願いし、その間に、何とか常務に連絡し、女房の実家に来て、やっと携帯がつながった状況やワコーさんとの連携にて製品出荷の実現性を説明し、本社からは上海工場からE經理と出向組三名が翌日（二三日）に東京の空港に到着し、その日に気仙沼出身社員と合流し、レンタカーで宮城に目指すことを知り、相変わらずのE總經理のレスポンスの早さに驚くと共に、無事に気仙沼までたどり着けるのか？ ルートがあるのか？ 心配だった記憶があります。携帯を切り、クルクル充電器の回すのをやめてもらったら、即座に充電切れの状態になりました……。

記録はさらに続くが、引用はここまでにしよう。

私的に書かれた「語り」を読むこと

東日本大震災という出来事は、被災の範囲もそれがもたらした被害の量と質も、非常に広く多様であった。被災者と一言でいうけれども、そのときどこにいたか、どういう行動をとったか、は一人一人異なり、それが生死を分けたような事例は多数報告されてきた。K氏の手記もそのひとつである。これが「日記」や「手紙」と異なる点は、三月一日とその翌日というごく短い時間の経験を、何度も繰り返し点検するように回想し文章化している点と、この経験が自分だけの内にしまっておくものではなく、誰かに語り文章にすることで出来事とそれに対する自分の態度を、質的に転換することになる、と考え始めたときからK氏にとって大きな意味をもったということだろう。

### おわりに 私的な「語り」を読む、ことの有効性

近代の自然科学は、感覚知覚で経験が捉えたものをただ自然的な言葉で理解することをやめて、もっと精密で一義的な概念を定義し、論理・実証的手続きによって、世界を根柢から把握し説明しようとした。それは確かに誰もが「見れば判る」ものではなくて、対象がもつ固有の特徴・性質を分析し、要素相互の関係を考究し解明することで「判る」ことを目指した。その「理論言語」がさまざまな現象を説明し、それをもとに工学的応用技術が自然そのものを人間が操作的に改変することにある程度成功したので、社会科学も「自然言語」から「理論言語」への転換を行えば、複雑な社会現象を説明し、改変することも可能になると考えた。

二〇世紀の社会学は、この流れに沿って近代科学の土俵にのぼり、統計から数量的社会調査へ、人間の社会的

行動を精密に測定し分析できるという見通しの下に、技法の洗練を追求する一方で、日常生活世界を生きている自分を含む「自然言語」が語る世界に、こだわってきた。社会学における「理論」というものを考えてみれば、一方の極にエレガントでシンプルな数学的数式記号と数量データが想定されると同時に、他方の極に変幻自在でどろどろもやもやした混沌「自然言語」の世界がある。後者はそのままでは「理論」とは呼べないので、生活史研究に拠る社会学者はしつこくインタビューを武器に、言語データからなんとか「理論」にまで辿り着こうとする。

でも、こうしていくつか「手紙」や「日記」や「手記」の具体例をみていると、次のハイデガールの『存在と時間』の一節が、なにか意味ありげに蘇ってくるのである。

「Das Geradeおしゃべり」という表現は、このばあい非難する herabziehen(こきおろす)という意味で用いられているのではない。この語は、術語的には、日常的現在の了解の働きと解釈の働きとのあり方を構成する、ある積極的な現象を意味する。語り die Rede はたいいていそれ自身言表されるし、またすでにいつも発言された。語りは〔そのばあい〕die Sprache 言葉なのだ。そこでは言表されたことのなかに、そのつど既に了解されたことと、その解釈とが潜んでいる。Ausgesprochenheit 発言されたこととしての言葉は、自分の中に現存在のもつ了解の ausgelegtheit 解釈を秘めている。この〈解釈されている〉ことは言葉と同様に、もはやたんに目の前にあるだけのものではなく、その存在はそれみずから現存在的なものだ。この〈解釈されていること〉に現存在は、さしあたり、またある限界内で、いつでも引き渡されているのであって、

私的に書かれた「語り」を読むこと

それが、「誰にもあるありふれた」平均的な了解の働きとそれに属している情態の可能性とを、調整しまた区分している。発言されたことは、それが分岐した意義の諸連関の全体のうち、開示された世界の了解の働きと、それと根源を等しくして他人の共同現存在、およびその都度の自分自身の内・存在の了解の働きとを守っている。このように発言されてあることの中に、すでに託された了解は、かつては到達し受け継がれた、存在するものが die *Entdecktheit* 見いだされてあることにも、同じく存在についてのその都度の了解にも、新たに手がけられている解釈や概念的な分節のために自由に処理できる可能性や視界にも、該当する。しかし現存在のこの〈解釈されてあること〉という事実へのたんなる *der Hinweis* 指摘を超えて、いま、話されたしかつ話されている語りの実存論的なあり方が問われねばならない。そのあり方が、目の前のものとして解されないならば、語りの存在とはいったいどんなものであり、また語りの存在は、現存在の日常的なあり方について、原則的にどんなことをいうのだろうか。

(M・ハイデガー『存在と時間』中、原著一七八三年、桑本務訳、ただし訳文は一部筆者が改変している。一九六一年、岩波文庫、八三―八四頁)

ハイデガーがここで「存在」「現存在」「実存」などという言葉で、何を示そうと試みているかは、相当に混み入った議論になるので、いまはただ「存在」「存在者」と「あるということ」「あるもの」を物理的な実在とみなして、身体を持った人間をも含め客観性のもとに捉えられるし、それをあらしめている働きもまた「存在」に還元して理解できると考えた、とするとフッサールが始めた現象学の視線は、それを方法



の次元で根柢から批判する。ハイデガーもそこから出発して、「存在」に対して「現存在＝人間」を持ちだして『存在と時間』の段階では、「存在とはいかなるものか」は、「存在」について手の込んだ科学の方法で探求すれば解明されるのではなくて、われわれはすでに日常世界を生きている中で知っている、とくに人が何かについて、あるいは自分について語ることに現れている、ただそれを見るわれわれの意識や態度が近代科学的な視野に毒されてしまっている、と述べたように理解してもよい（かもしれない）。

「手紙」「日記」あるいは個人の「語り」を、そのような角度から読み込むことができるならば、社会学という「社会科学の一領域」が対象とする事象にとっても、新たな相貌のもとに見えなかったものが見えてくる、かもしれない。ただそれは、「日常言語」で語られたものを、そのまま並べれば「存在」が開示されるとは、とても言えない。

#### 註

(1) 実証科学的方法への傾斜が強い経済学や心理学では、仮説を検証する経験的データとは、統計的・実験的に厳密な手続きを経て得られた数量データでなければならず、そこから導かれる知見に、いかがわしい文学的ないわゆる「質的研究」のような方法を持ちこむことは、科学としての経済学や心理学を否定することだと考えるのも、それなりの歴史と根柢はあるのである。

(2) 中野卓『商家同族団の研究 暖簾をめぐる家と家連合の研究』未来社、一九六四年。

(3) B・G・グレイザー&A・L・ストラウス『データ対話型理論の発見——調査から如何に理論をうみだすか』後藤隆・大出春江・水野節夫訳、新曜社、一九九六年。

(4) William I. Thomas & Florian Znaniecki, *the Polish Peasant in Europe and America*. Edited and abridged by Eli Zaretsky.

私的に書かれた「語り」を読むこと

私的に書かれた「語り」を読むこと

University of Illinois Press, 1984

- (5) W・I・トリーナス&F・ズナニエツキ『生活史の社会学』桜井厚訳、お茶の水書房、一九八三年。八三〜八四頁。この訳書は原著の一部と日・ブルーマーの「ポーランド農民」論（一九三九）の二作の桜井による抄訳を合わせたもの。

- (6) 訳に使用したのは、William I Thomas & Florian Znaniecki, *the Polish Peasant in Europe and America*, Edited and abridged by Eli Zaretsky, University of Illinois Press, 1984

- (7) William I. Thomas & Florian Znaniecki *the polish peasant in Europe and America*, Edited and abridged by Eli Zaretsky, University of Illinois Press, 1984, pp.156-158.

- (8) W・I・トリーナス&F・ズナニエツキ『生活史の社会学』桜井厚訳、お茶の水書房、一九八三年。桜井厚「付論 生活史研究の課題」

- (9) それには、このような原資料を大量に集めることが困難であることと、手紙、とくに個人の私信が頻繁にやり取りされ、それがまとまって保存されるような条件も失われたことが影響しているであろうし、通信手段も手紙から電話、ファックス、メール、SNSと変化した現代では、もはやこうした研究は不可能になるだろう。

- (10) オスカー・ルイス『サンチエスの子どもたち』柴田稔彦・行方昭夫・上島健吉訳、みすず書房、一九六九年。同『ラ・ヴィーダ——プエルト・リコの一家族の物語』行方昭夫・上島健吉訳、みすず書房、一九七一年。

- (11) 村上陽一郎『科学と日常性の文脈』海鳴社、一九七九年。
- (12) 村上陽一郎、前掲書、一四四〜一四七頁。

- (13) この手記『追想』は、K氏が個人的に書いたワープロ原稿をパンフレットにしたもので、筆者が二〇一四年六月に気仙沼を訪れた際、K氏に個人的にいただいたものである。

#### 参考文献

入江昭『太平洋戦争の起源』東京大学出版会、一九九一年。

桜井厚・小林多寿子『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』せりか書房、二〇〇五年。

B・G・グレイザー&A・L・ストラウス『データ対話型理論の発見——調査から如何に理論をうみだすか』後藤隆・大出春江・水野節夫訳、新曜社、一九九六年。

A・L・ストラウス&A・J・コービン『質的研究の基礎——グラウンデッド・セオリーの技法と手順』医学書院、一九九九年。  
G・オルポート編『ジェニーからの手紙』青木孝悦・萩原滋訳、新曜社、一九八三年。

Habermas, Jürgen, *Vorlesungen zu einer sprachtheoretischen Grundlegung der Soziologie (1970-71)*, Vorstudien und Ergänzungen zur Theorie des kommunikativen Handelns, 1984. (ユルゲン・ハーバーマス『意識論から言語論へ——社会学の言語論的基礎に  
関する講義』森元孝・千川剛史訳、マルジュ社、一九九〇年)

Merleau-Ponty, Maurice, *Les sciences de l'homme et la phénoménologie "avant-propos, Phénoménologie de la perception*, Eds.Gallinard, Paris,1945.

Plummerken, *Documents of life 2: an invitation to a critical humanism*, SAGE,2001.

K・ブラマー『生活記録の社会学——方法としての生活史研究案内』原田勝弘・河合隆男・下田平裕身監訳、光生館、一九九一年。  
中野卓『商家同族団の研究 暖簾をめぐる家と家連合の研究』未来社、一九六四年。

中野卓編著『口述の生活史——或る女の愛と呪いの日本近代——』御茶ノ水書房、一九七七年。

William I. Thomas & Florian Znaniecki, *the polish peasant in Europe and America*, Edited and abridged by Eli Zaretsky.

W・I・トーマス&F・ズナニエツキ『生活史の社会学』桜井厚訳、お茶の水書房、一九八三年。

O・ルイス『サンチェスの子どもたち』柴田稔彦・行方昭夫訳、みず書房。

O・ルイス『貧困の文化——メキシコの、五つの家族の物語』高山智博・宮本勝・染谷臣道訳、ちくま学芸文庫、二〇〇三年。  
村上陽一郎『科学と日常性の文脈』海鳴社、一九七九年。

山田風太郎『戦中派不戦日記』講談社文庫、一九八五年。